ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第137号

京都府京丹後市上野遺跡における堆積物の帯磁率測定----------上峯篤史------1
共同研究　京都府内における横穴式石室導入期の古墳の検討---------竹村亮仁・荒木瀬奈------5
研究ノート　西外古墳群の研究（上）----------桐井理揮・肥田翔子・木村結香-----17
研究ノート　古墳築造終焉後の環状瓶（上）----------名村威彦-----29
研究ノート　左京近衛・西洞院辻の町家について----------加藤雄太-----35
令和元年度発掘調査略報----------43
　　２．保安塚・長井野塚・奥城土遺跡
　　３．芝山遺跡・芝山古墳群第19次（Ｏ・Ｐ地区）
　　４．犬飼遺跡第２・３次
　　５．上野遺跡第３次
　　６．丹波丸山古墳群第４次
　　７．稚児野遺跡第２次
　　８．稲泉遺跡第１次
長岡京跡調査だより・133----------55
現地公開（令和元年度下半期）----------57
普及啓発事業（令和元年度下半期）----------58
センターの動向----------60

2020年３月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府京丹後市上野遺跡における堆積物の帯磁率測定

上 峯 篤 史

1. 分析の目的

帯磁率（magnetic susceptibility）とは、外部から磁場を加えた場合の磁化のしやすさを示す値で、磁化率とも呼ばれる。岩種の判定や堆積物等の被熱の有無の判断に用いられるなど、考古学への応用も期待されるが、地質学の様々な領域では、堆積物の帯磁率測定が従来から頻繁におこなわれてきた。例えば古気候変動のプロキシである酸素同位体比変動と帯磁率変動との間に強い相関があることが知られており、帯磁率測定から更新世の気候変動が探られている（鳥居ほか1998）。古土壌中で発達するマグネタイトなどの磁性粒子が、帯磁率の上昇を招いていると考えられている。また帯磁率が粒径と反比例することや、火山灰に強磁性鉱物が多くふくまれるために、火山灰降灰層準の帯磁率が高くなるなど、堆積物の区分や離れた地点の層序の対比においても、帯磁率は便利な指標となる（中井2004）。これらを中国・韓国の旧石器時代遺跡に応用して、堆積物の年代決定と旧石器編年の構築に挑んだ研究プロジェクトも記憶に新しい（松藤編2008）。

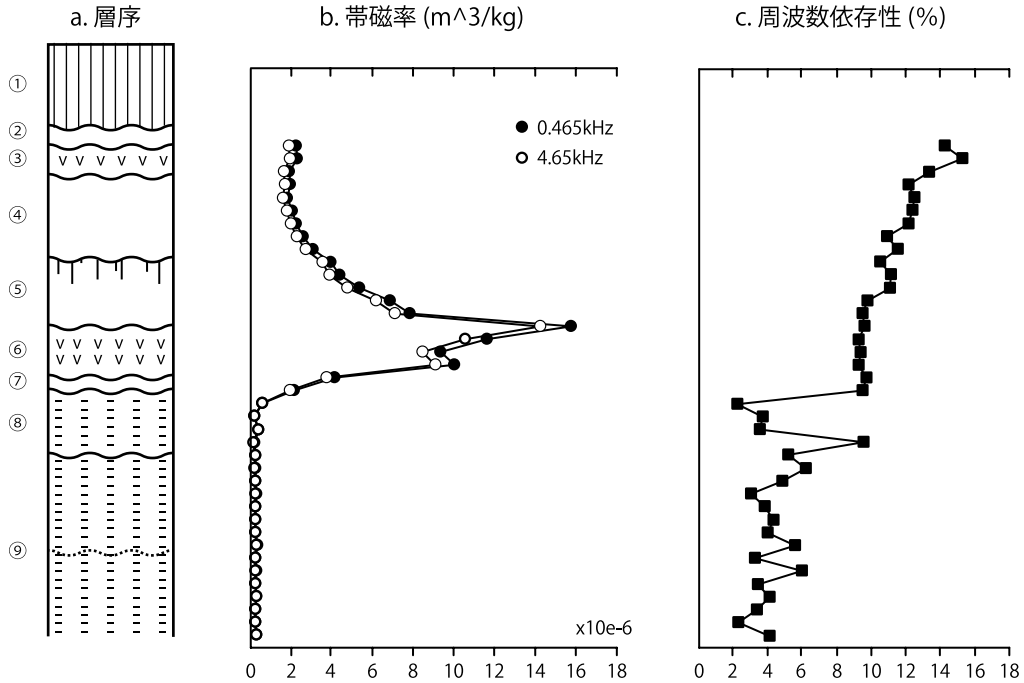
これらの研究に触発されて、筆者も帯磁率測定の環境を整え、日本国内や中国の旧石器時代遺跡で実践している。縄文時代以降とは異なり、年代情報の獲得が難しい旧石器時代遺跡において、年代決定のための手がかりを得ることを目的に帯磁率測定を続けているところである（上峯ほか2018、上峯2019）。このたび、遺跡発掘調査への技術協力の一環として、京丹後市上野遺跡にて堆積物の帯磁率を測定する機会を得たので、その成果を報告する。

2. 分析の対象

上野遺跡の堆積物の分析は、2019年度調査地の南西隅深掘部で実施した。サンプリングに先立って壁面をクリーニングし、暫定的に層序を以下のように記載した（第１図a）。

⑨層は褐鉄鉱を含有する砂質シルト層、⑧層は黄灰色のシルト層である。両層の層理面は不整合で、褐鉄鉱がやや多く見られる。⑦層は暗灰色シルト層で、⑧層上部がやや土壌化したものと推定される。⑥層は軽石層、⑤～④は褐色のローム層で、⑥層と類似する軽石が⑤層中に、面積割合で1％程度ふくまれている。⑤・④層は不整合面をはさむため比較的明瞭に区分できるが、④層はさらに細分できる可能性がある。③層は火山ガラスをふくむ淡褐色ローム層、②層は暗茶褐色のローム層、①層が表土・耕作土である。

京都府埋蔵文化財調査研究センターによる発掘調査で旧石器と見られる遺物群が出土している層準は、④層の中部である。本層をふくむ上野遺跡の層序を理解するため、②～⑨層において帯磁率測定のためのサンプルを採取した。



第１図　京丹後市上野遺跡から得られた帯磁率と周波数依存性の変動

3. 分析の方法

夏原技研製ポリカーボネート製７ccキューブを、ゴムハンマーを使用して土層壁面に５cm間隔で打ちこみ、下位からこれを回収して、南山大学上峯研究室に搬入した。水分量が帯磁率に影響を与えるため、研究室で各サンプルを風乾させ、重量が変化しなくなった段階で蓋をし、セロハンテープを使って密封した。

帯磁率測定には英Bartington社製MS2Bセンサ（S/N:1160）とMS3帯磁率計（S/N:0589）を用い、これをPCに接続して、付属のBartsoft（ver.4.2.1.3）経由で操作した。測定のたびにA&D社製電子天秤EK-610i（S/N:Q2709977, 校正済）で各サンプルの重量をはかり、その値をBartsoftに入力して、単位重量あたりの初期帯磁率（mass specific susceptibility）をもとめた。測定時間は、筆者の環境で最も精度が高くなる５秒に設定した。各サンプルを低周波モード（0.465kHz）および高周波モード（4.65kHz）で３回ずつ測定し、それぞれで中央値を計算した。

互換性のある分析値の獲得と、機器の状態確認のため、硫酸銅（$CuSO_4 \cdot 5H_2O$, 鹿一級, Cat. No.07516-01, 関東化学）、モール塩（$Fe(NH_4)_2(SO_4)_2 \cdot 6H_2O$, 一級, Cat. No.009000515, 林純薬工業）、蒸留水（H_2O, Cat. No.877131, 日本薬局）、塩化ニッケル（$NiCl_2 \cdot 6H_2O$一級, Cat. No.14000685, 林純薬工業）、塩化ナトリウム（NaCl, 特級, Cat. No.19001895, 林純薬工業）、塩化コバルト（$CoCl_2 \cdot 6H_2O$, 特級, Cat. No.03003252, 林純薬工業）をサンプルと同じキューブに入れて密閉した。これを標準試料として、サンプルと同様の手順で測定した。前三者については『岩波理化学辞典第５版』から文献値を、後三者については伊丹ら（2014）の示すcgs単位系での値を上野（1987）の式でSI単位系に換算した値を、文献値として採用した。これらから得られた検量線（R^2＝0.9997）でサンプルの測定値の中央値を換算して、分析値とした。

サンプルおよび標準試料の測定には約半日を要したが、この間のドリフトノイズは、各サンプルの測定の前後で大気を測定して、Bartsoft上で補正されている。サンプル測定の合間に標準試料（硫酸銅）を測定してドリフトを確認しているが、装置の分解能（1×10e-6SI）の範囲内では、ドリフトノイズはうまく除去されている。

4. 分析の結果

第１図のbに検量線による校正をへた帯磁率の分析値を、cに校正前の測定値から計算した周波数依存性を示す。周波数依存性とは、低周波モードと高周波モードの測定値の差を、低周波モードにおける測定値で規格化した値である。帯磁率は⑦層から急激に上昇し、⑥層最上部でピークを示す。⑤層以上では、帯磁率が急激な減少に転じるが、③層ではごくわずかに値が上昇している。周波数依存性は、⑧層以下では４％程度で推移しているが、⑦層以上では10％をこえる。③層では約14％にまで達している。

5. 議論

帯磁率の急激な上昇は層相の変化を示すと考えられ、⑧／⑦層境で堆積物が大きく変化していると見なせる。⑨～③層は、上野遺跡周辺の海岸段丘堆積物を調査した石田ら（2016）の記載する「ローム層」に対応する。⑨層は下位ほど堆積物の粒径が大きくなる印象があり、粒径の大きい反磁性鉱物が多くふくまれていると予想される。

⑥層を頂点とするピークならびに③層での帯磁率の上昇は、火山灰に影響を受けていると推定される。⑥層は火山砕屑物であり、③層をルーペで観察すると、火山ガラス片が散見される。石田ら（2016）の記載にしたがえば、⑥層は大山倉吉火山灰（DKP, 60ka, 長橋ほか2016）、③層は姶良Tn火山灰（AT, 30ka, Smith *et al.* 2013）の降灰層準と考えられる。小倉ら（Ogura *et al.* 1995）は、DKPでは最上部で帯磁率が高くなることを報告し、岡田ら（1998）もこれを追認している。AT降灰層準の帯磁率が高くなることは、琵琶湖高島沖ボーリングコアでも確かめられている（吉川ほか1993）。両者の帯磁率の高低も、藤井ら（2011）の所見と矛盾しない。

約0.1μmより細粒のマグネタイトが存在する場合、高周波モードでは磁化の変化が追随できなくなるため、帯磁率の値が小さくなって、周波数依存性は大きくなる。そのため周波数依存性は、磁性粒子の粒径を簡易に推定する指標として活用されている。今回得られた周波数依存性のデータは帯磁率の変化と比例関係は示さず、⑥層以上では、厳密には反比例の関係にある。⑥層以上のどの層準にも極細粒の磁性粒子が卓越していると推定され、DKPの拡散や再堆積にともなって下位層の周波数依存性が希釈されたと考えられる。

分析の機会を与えて頂いた京都府埋蔵文化財調査研究センターの皆様、ならびにサンプルの採取と測定に協力してくれた南山大学学生（鵜飼芽衣、飯塚寿音、堀内祐花、加藤大智、岩月佑真）の皆に謝意を表したい。

（うえみね・あつし＝南山大学人文学部人類文化学科）

【引用文献】

石田志朗・小滝篤夫・糸本夏実 2016「海岸段丘堆積物にみる旧汀線－京丹後市丹後町上野の場合」『日本地質学会学術大会講演要旨』（第 123 年学術大会）。

伊丹芳徳・稲田佳彦・喜田雅一 2014「常磁性磁化率を測定する簡便な実験教材の開発」『物理教育』62(4), pp.221-225。

上野宏共 1987「岩石の時期的諸量の国際単位系（SI）と CGS 系間の換算」『岩石鉱物鉱床学会誌』, pp.441-444。

上峯篤史・鳥ヶ崎遺跡発掘調査団 2018「島根県松江市鳥ヶ崎遺跡の後期旧石器」『パレオアジア文化史学第 6 回研究大会予稿集』, p.59。

上峯篤史 2019「東アジア鋸歯縁石器群の基礎的研究（１）」『パレオアジア文化史学第 8 回研究大会予稿集』、p.24。

鳥居雅之・福間浩司 1998「黄土層の初磁化率：レビュー」『第四紀研究』37(1), pp.33-45。

中井睦美 2004『ジオロジストのための岩石磁気学：帯磁率・古地磁気から AMS まで』地学団体研究会。

長倉三郎ほか編『岩波理化学辞典第５版』　岩波書店。

長橋良隆・深谷桃子・木村純一・常 青・佐川拓也・中川 毅・池原 研・KR15-10 乗船研究者一同・SG06 プロジェクトメンバー一同 2016「大山倉吉テフラと山陰 1 テフラの層序と年代：若狭湾沖堆積物コアと水月湖 SG06 コアによる検討」『日本地質学会学術大会講演要旨』（第 123 年学術大会）。

藤井純子・中島正志 2012「岡山・鳥取県に分布する大山上部火山灰層の古地磁気」『福井大学教育地域科学部紀要』2, pp.71-85。

松藤和人編 2008『東アジアのレス - 古土壌と旧石器編年』雄山閣。

吉川周作・井内美郎 1991「琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序」『地球科学』45(2), pp.81-100。

Ogura *et al*. (1995) “Magnetic Susceptibility of the Daisen Tephra Formation in West Japan and its Applicability to Tephrostratigraphy”『第四紀研究』34(4), pp.65-73。

Smith *et al.* (2013) "Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka". *Quaternary Science Reviews* 67, 121-137.

共 同 研 究

京都府内における横穴式石室導入期の古墳の検討

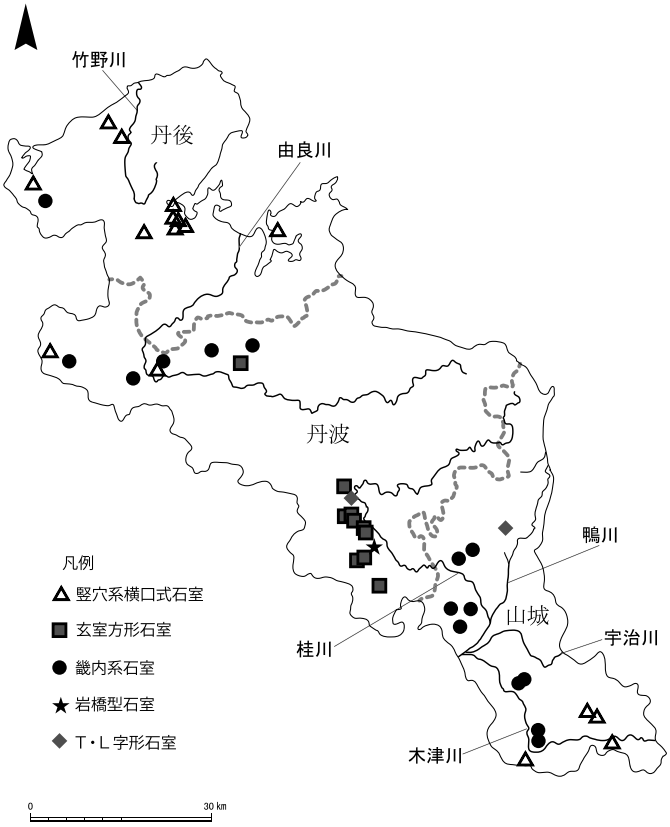
竹 村 亮 仁・荒 木 瀬 奈

はじめに

府内における横穴式石室の研究は、府内の地域ごとの研究が多く、府内全域にわたる比較、検討は遅れ気味である。もちろんその理由には、畿内に近い地域や日本海沿岸地域など、古墳の供給に対して地域性が強いことや受け入れる素地などに影響していると考えられる。本稿の対象となる導入期の横穴式石室の形態には、畿内型石室、玄室方形プランの石室、竪穴系横口式石室、玄室平面形がＴ・Ｌ字形などの特異な形状となる石室、和歌山市岩橋千塚古墳群周辺に多く見られる岩橋型石室などが確認されている。府内全域について整理してみたい。

１．京都府内の横穴式石室導入期の状況

横穴式石室導入期の京都府内の墓制については、木棺直葬と竪穴系横口式石室など竪穴系と横穴系の埋葬施設が混在して分布する。北部では竪穴系横口式石室が採用される事例が多く、南部では畿内型石室の採用の事例が多いことがわかる(第１図)。各地域の石室の構造や分布などについて以下にまとめた。



第１図　京都府導入期石室分布図

（１）丹後地域

竪穴系横口式石室が多数分布することが特徴的である。同地域における導入期の竪穴系横口式石室の分布は、野田川河口部にやや集中して築造されている様子が見られるが、それ以外は点在的な分布状況を呈する。時期ごとに見ていくと、ＭＴ15型式期より離山古墳や霧ヶ鼻11号墳に竪穴系横口式石室

が導入され、続くＴＫ10型式期以降も継続して築造される。また、但馬地域でも、早い段階で竪穴系横口式石室が複数築造される。

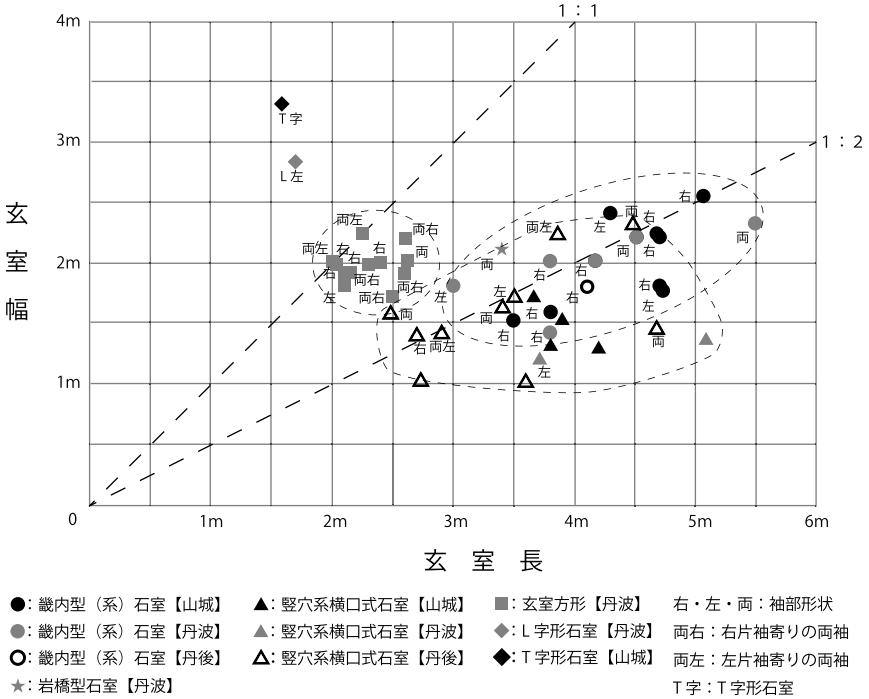
竪穴系横口式石室以外に、崩谷３号墳などの畿内型石室も築造されるが、導入期の段階では、竪穴系横口式石室よりも少数である。

（２）丹波地域

丹波北部（福知山・綾部市域）と丹波南部（亀岡・南丹市域）で様相が異なる。丹波北部においても竪穴系横口式石室が少数確認されている。丹後と合わせて、府内で明確に竪穴系横口式石室と判断できる石室は由良川以北に分布する。福知山市域では、竪穴系横口式石室である池の奥４号墳が築造される。この他に同形態の石室の可能性のある古墳として、流尾古墳があげられる。池の奥４号墳と同時期あるいは前後する時期に、福知山・綾部市域で高谷３号墳、中ノ段４号墳などの畿内型石室が複数築造される。以上から丹波北部では、周辺地域で確認されている石室が少数分布するものの、全体としては畿内型石室が複数分布する様子が確認できる。

丹波南部では、玄室方形で九州系の要素を持つ石室が複数築造される。特に、玄室方形の石室が、亀岡盆地北部・園部盆地周辺の径約20km圏内に集中して分布する状況が特徴的である。この付近以外では、久田山Ｂ５号墳や丹波西部の氷上郡域に分布する兵庫県丹波市多利向山Ｃ－２号墳、同井原至山古墳にて玄室方形の石室が確認されている。丹波南部に隣接する多紀郡篠山盆地では、当該時期には畿内型石室が築造される。

亀岡盆地西部の行者山麓では、岩橋型石室である拝田16号墳など、導入期段階から特徴的な石室が築造される。導入期以降も伯耆地域で複数確認されている中高式石室を採用する北ノ庄３号墳や鹿谷古墳群、小金岐古墳群内で石棚を持つ石室が複数築造されるなど、特異な構造を持つ石室の築造が継続する。



第２図　石室平面規模

付表１　京都府内おける導入期古墳一覧

石室形態	番号	古墳名	所在地	墳丘	石室時期	石室								玄門部	主要出土遺物	備考
						平面形	玄室					羨道				
							長さ	幅	長/幅	平面形	石積特徴	長さ	幅			
竪穴系横口式石室	1	離山古墳	京丹後市（網野町）	円(15)	TK10	両袖か	2.77	1	2.77	逆台形		0.7～1	1		土・須・鉄器・玉類	
	2	くらがり２号墳	京丹後市（網野町）	円(15)	６世紀前半			1		長方形	腰石				須	
	3	遠所31号墳	京丹後市（弥栄町）	円(13)	TK10		3.6	1	3.6	長方形			1		須・鉄器	
	4	陵神社12号墳	京丹後市（久美浜町）	円(19)	TK10	両袖	4.72	1.44	3.28	長方形					土・須・鉄器・玉類	
	5	入谷西Ａ１号墳	与謝野町（加悦町）	円	TK10	両袖	3.89	2.26	1.72	長方形	腰石	2.11	0.86～1.6	立石	土・須・鉄器・馬具	羨道ハの字形
	6	霧ヶ鼻６号墳	宮津市	円(11)	TK10	右片袖	2.7	1.4	1.93	長方形	腰石		1.2	段積みか	須・鉄器・玉類	組合式箱式石棺
	7	霧ヶ鼻８号墳	宮津市	円(6.7)	TK10	両袖	3.4	1.6	2.13	やや逆台形			0.95	段積み	須・鉄器・玉類	
	8	霧ヶ鼻10号墳	宮津市	円(10)	TK10	両袖	2.9	1.4	2.07	やや逆台形か	腰石	1.2	0.8	立石	須	
	9	霧ヶ鼻11号墳	宮津市	円(10)	MT15	左片袖	3.5	1.2	2.92	長方形		1	1	段積み梱石	須	組合式箱式石棺
	10	倉梯山１号墳	宮津市	円(16)	6世紀前半	両袖	4.5	1.6～2.3	1.96～2.81	逆台形		3.2	1.1	梱石	須･鉄器･玉類･耳環	組合式箱式石棺
	11	浦入西２号墳	舞鶴市	円(11)	TK10	両袖	2.45	1.55	1.58	方形	腰石	1.8	0.8	立石	須・鉄器・耳環	
	12	池の奥４号墳	福知山市	円(18)	6世紀中頃	左片袖	3.7	1.2	3.08	長方形	腰石	1.8	1	立石	土・須・鉄器・耳環	
	13	流尾古墳	福知山市（夜久野町）	円(15)	TK10		5.13	1.38	3.72	長方形					須	
	14	音乗谷古墳	木津川市（木津町）	帆立貝か造出付円(22)	TK10		3.7か	1.7	2.18か						須･鉄器･馬具･埴輪（円筒・形象）	
	15	草ヶ山１号墳	木津川市（加茂町）	円(14)	6世紀前半か		4.2	1.3	3.23	長方形か						
	16	坂尻１号墳	和束町	円(13)	6世紀中頃か	無袖か	3.9	1.5	2.6							
	17	坂尻２号墳	和束町	円(10)	6世紀中頃か	無袖か	3.8	1.3	2.92							
玄室方形	18	久田山Ｂ５号墳	綾部市			左片袖	2.1	1.8	1.17	方形					須・鉄器	
	19	園部天神山１号墳	南丹市（園部町）	円(12)	TK10	両袖(右片袖寄り)	2.6	2	1.3	方形		2.8	0.65～0.78	段積み梱石	須・鉄器・耳環	
	20	園部天神山２号墳	南丹市（園部町）	円(11)	TK10	右片袖か	約２	約２	1	方形		約1.5	約１		須･鉄器･馬具･耳環・玉類	
	21	小山２号墳	南丹市（園部町）	円(8.4)	TK10	右片袖	2.3	2	1.15	方形		2.1	0.75	段積み	玉類	
	22	新堂池２号墳	南丹市（園部町）	円(12)	TK10	右片袖	2.4	2	1.2	方形		1.5	0.85	段積み	土・須	
	23	小谷17号墳	南丹市（八木町）	円(9)	TK10	右片袖	2.1	1.9	1.11	方形	腰石	1.2	0.7	段積み梱石	土・須・鉄器・馬具・玉類	
	24	城谷口２号墳	南丹市（八木町）	円(10)	TK10	両袖(右片袖寄り)	2.6	1.9	1.37	方形		1.5	0.7	段積み梱石	須・鉄器	蛇行剣出土
	25	北ノ庄13号墳	亀岡市	円(8.8)	MT15	両袖(右片袖寄り)	2.18	1.62～1.9	1.35～1.15	やや逆台形	腰石	1.5～	0.6～1	立石	須・鉄器・玉類	羨道スロープ状ハの字形
	26	北ノ庄14号墳	亀岡市	円(10)	MT15	両袖(右片袖寄り)	2.6	2.2	1.18	方形	腰石	2.5	0.6～1.3	立石	須・鉄器	羨道スロープ状ハの字形
	27	医王谷３号墳	亀岡市	円(10)	TK10	両袖(右片袖寄り)	2.5	1.74	1.44	方形	腰石	0.7	0.7	立石梱石	土・須・鉄器・玉類・紡錘車	
	28	多利向山C-2号墳	兵庫県丹波市（春日町）	円(11.5)	MT15	両袖(左片袖寄り)	2.25	2.23～2.25	1.01～1	方形	腰石	1.95	0.72～0.97	立石	須	羨道ハの字形
	29	井原至山古墳	兵庫県丹波市（山南町）		MT15	両袖(左片袖寄り)	推定2	2	1	方形か			1	段積み梱石	須・鉄器・馬具	羨道ハの字形

畿内型石室	30	崩谷３号墳	京丹後市(久美浜町)	円(16)	TK10	右片袖	4.1	1.6～1.8	2.28～2.56	長方形		1.5	1	段積み	須･鉄器･玉類･耳環	
	31	小田古墳	宮津市	円(14)	TK10			2.2							土・須・鉄器・馬具	
	32	長者森古墳	福知山市(夜久野町)	円(23)		両袖	5.5	2.3	2.39	長方形		6.7	1.1	立石か		
	33	鴨野１号墳	福知山市	円(13)	TK10	右片袖	3.8	1.4	2.71	長方形					須・鉄器・耳環	
	34	中之段４号墳	福知山市	円(16)	TK10	左片袖	3	1.8	1.67	長方形		5.2	1.2		須・鉄器・耳環	
	35	高谷３号墳	綾部市	円(17.5)	TK10	両袖か	4.5	2.2	2.05	長方形か		5	1.5～1.7		須･鉄器･耳環･馬鐸・紡錘車	
	36	キツネ塚古墳	綾部市	円(15)	TK10	右片袖	4.2	2	2.1	長方形				段積み	土・須・鉄器・耳環・馬具・土玉・砥石	
	37	拝田9号墳	亀岡市	円(8)	MT15			1.9								
	38	芝１号墳	京都市	方円(32)	MT15	右片袖	3.8	1.55	2.45	長方形		2以上	0.6	段積み	土・須・鉄器・馬具・埴輪(円筒・形象)	
	39	天塚古墳くびれ部石室	京都市	方円(71)	６世紀前半	左片袖	4.7	1.8	2.61	長方形		3	1.25	段積み	須	
	40	常盤御池古墳	京都市	円(17)	TK10	左片袖	4.7	1.8	2.61	長方形		3.8	0.9	段積み	須・馬具	
	41	物集女車塚古墳	向日市	方円(48)	TK10	右片袖	5.07	2.55	1.99	長方形		5.83	1.38	段積み	土・須・鉄器・馬具・玉類・三輪玉・馬鐸・埴輪(円筒)	組合式家形石棺
	42	井ノ内稲荷塚古墳	長岡京市	方円(46)	TK10	右片袖	4.7	2.2	2.14	長方形		5.5	1.3	段積み	土・須・鉄器・馬具	組合式木棺
	43	五ヶ庄二子塚古墳	宇治市	方円(112)	６世紀前半										土・須・馬具	
	44	胄山１号墳	城陽市	方円(30)	MT15	右片袖	3.8	2	1.9	長方形		3.8	1.2		須・埴輪(朝顔・形象)	
	45	胄山２号墳	城陽市	円(15)か方円(28.5)	MT15	左片袖か	4.3	2.4	1.79	長方形		2.2	0.95		土・須・鉄器・馬具・耳環	
	46	上狛天竺堂１号墳	木津川市(山城町)	方円(27)	TK47	右片袖	3.5	1.5	2.33	長方形					土・須・鉄器・馬具・埴輪(円筒)	
	47	車谷２号墳	木津川市(山城町)	円(18)	MT15	左片袖	4.7	2.2	2.14	長方形		3.1	0.9	段積み	土・須・鉄器	
	48	山際１号墳	木津川市(山城町)	円(24)	MT15			2.2							須･埴輪(円筒)	
その他 横穴式石室	49	拝田16号墳	亀岡市	方円(44)		両袖	3.4	2.1	1.62	長方形			0.75	段積み		岩橋型石室
	50	新堂池１号墳	南丹市(園部町)	円(約15)	TK10	L字(左片袖)	1.7	2.8	0.61	L字		3.3	1	段積み	土・須	
	51	本山神明１号墳	京都市	円(約10)	MT15	T字	1.6	3.3	0.48	T字		1.3	1	段積みか	須	

※　方円＝前方後方墳／規模の単位はm／土＝土師器・須＝須恵器

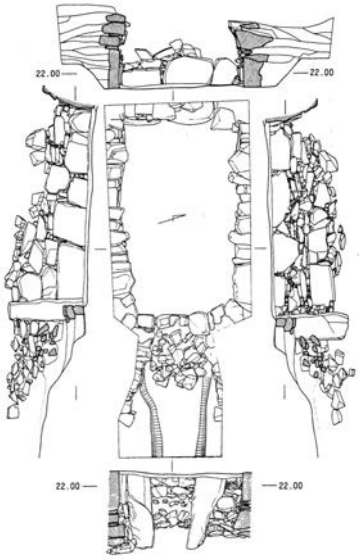
（３）山城地域

ＭＴ15段階に畿内型石室が出現、複数地域で畿内型石室が分布する状況が確認できる。また南山城の相楽郡域には、竪穴系横口式石室の可能性のある古墳が複数分布する。北山城の岩倉盆地に、Ｔ字形石室を埋葬主体とする本山神明１号墳が単発的に築造される。

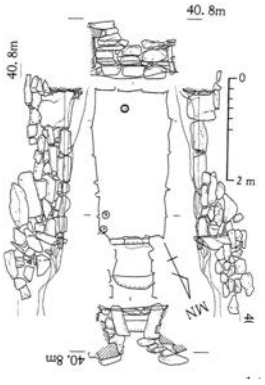
２．各石室構造の検討

（１）竪穴系横口式石室

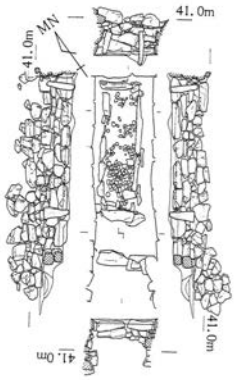
竪穴系横口式石室の平面形については、第２図を見ると広範囲に分布しており、規模や数値において多様性が認められる。玄室長については2.7～2.9m、3.5～3.9m、4.7～5.1mの３つの範囲に若干の集中域が確認できる。玄室幅については、多くが1.0～1.7mの範囲に分布することから、他の形態の石室と比較して幅が狭い石室が多い様子が窺える。



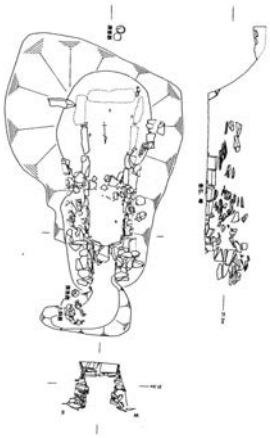
与謝野町 入谷西Ａ- １号墳



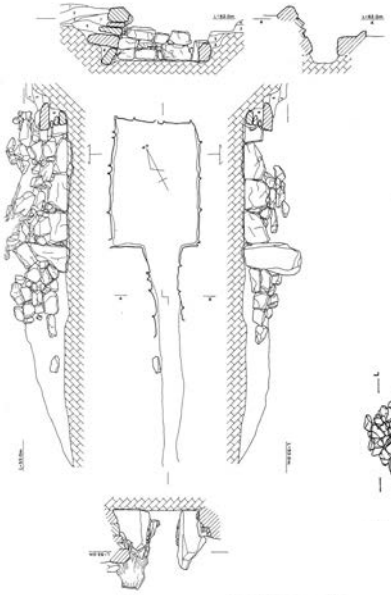
宮津市　霧ヶ鼻 10 号墳



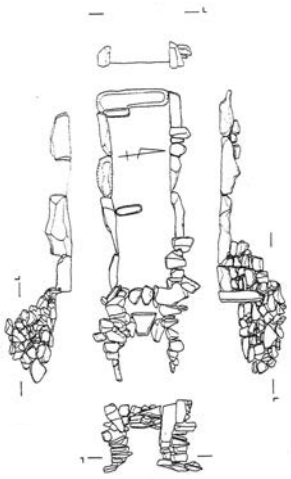
宮津市　霧ヶ鼻 11 号墳



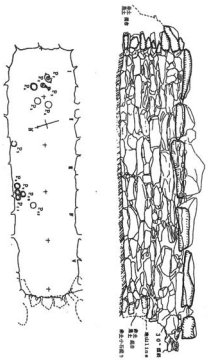
京丹後市　離山古墳



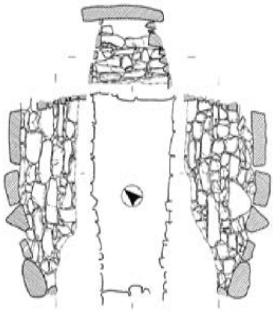
舞鶴市 浦入西２号墳



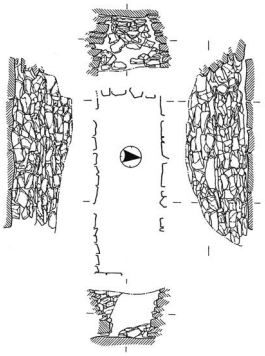
福知山市　池の奥４号墳



福知山市　流尾古墳



和束町　坂尻１号墳

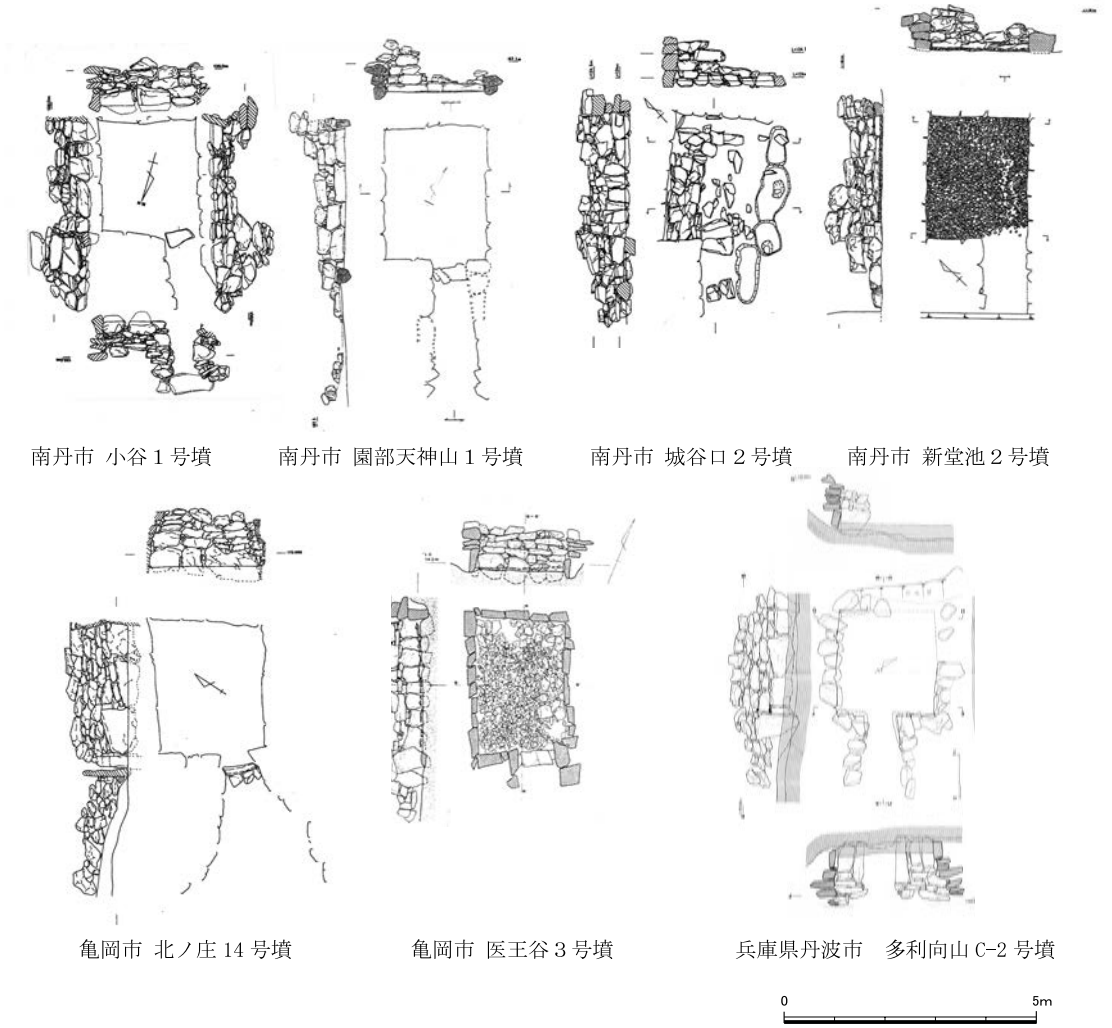


木津川市　草ヶ山１号墳

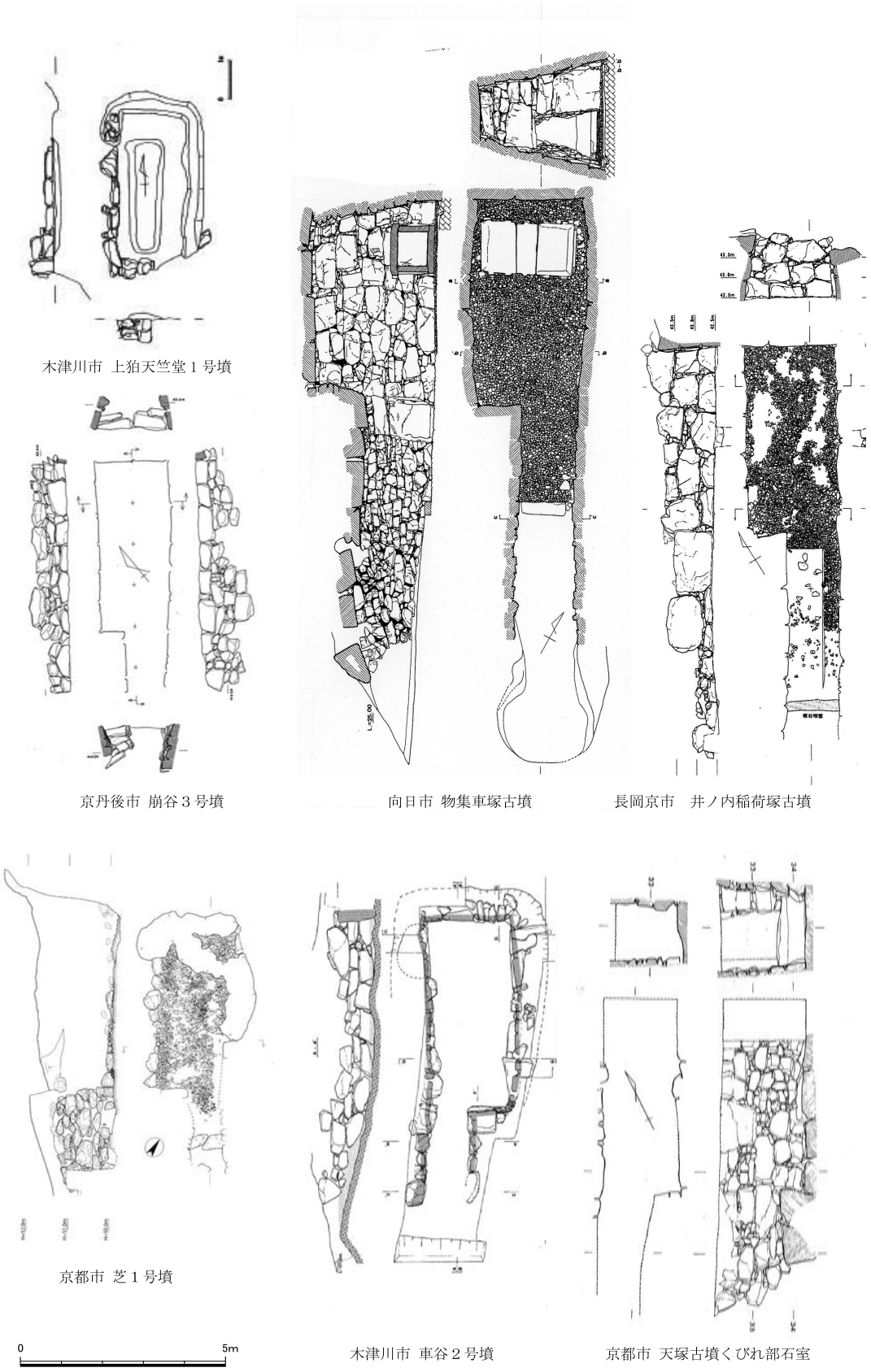
第３図　導入期における竪穴系横口式石室

第２図と各石室実測図を見ると、丹後・丹波北部に分布する竪穴系横口式石室の平面形は、次の４つの特徴に区分できる（第３図）。まず第１に両袖で畿内型石室と近似する幅を持つ玄室（入谷西A-1号墳、倉梯山１号墳など）、第２に逆台形の玄室（離山古墳、倉梯山１号墳など）、第３に、方形に近い玄室（浦入西２号墳など）、そして第４に幅が狭い玄室（上記以外）を想定する。さらに、羨道部の構造、玄門部の構造（梱石の有無等）、袖部の構造（形状、石材は立石か段積みか）、石材の使用方法（腰石の有無等）等の細部の構造を検討すると、石室ごとに特徴があり、全体的に多様な様相が確認できる。中でも入谷西A-１号墳では、玄門部に立石を設置すること、ハの字状に開く羨道部を有することから、明確に九州系の影響が認められる。(注1)

南山城の竪穴系横口式石室の可能性がある石室については、羨道、玄門部構造など不明瞭ではあるが、玄室長3.7～4.2m、同幅1.25～1.7mの範囲に収まり、数値上は近似値を示すことがわかる。ただし、玄門立石や腰石などを確認することができず、丹後・丹波北部の竪穴系横口式石室とは区別する必要がある。



第４図　導入期における玄室方形プラン横穴式石室図



第５図　導入期における畿内型石室図

（２）玄室方形（第４図）

丹波西部の兵庫県域においても玄室方形プランを持つ石室が２基確認されており、併せて検討する。玄室長2.05～2.65m、玄室幅1.75～2.05mまでの範囲に集中し、丹波西部の２基の数値を合わせても上記の範囲を逸脱する石室は認めらない（第２図）。この形態の玄室平面形からは全体的に均一的な様相が確認できる。

しかし、各部の構造や壁面の石積み方法などの石室を構成する各部分、要素については、個々の石室で相違する部分が多い。時期的な変遷を追うと、ＭＴ15型式段階に比定される北ノ庄13・14号墳、多利向山Ｃ－２号墳などでは、玄門立石、基底石に腰石設置、板石閉塞、ハの字状に開く羨道、玄室平面は逆台形などの九州系の要素が認められる。続くＴＫ10型式段階では、上記の要素が見られない、あるいはいずれかに限られる様子が見られる。また、城谷口２号墳の石障や新堂池２号墳のように平面形以外は畿内型石室と類似する要素を持つ石室など、新たな特徴を持つ石室が築造される。全体としては多様な様相を呈するが、例外として、袖部の形状には地域によるまとまりが指摘できる可能性があり、丹波南部の亀岡盆地・園部盆地に分布する石室については、右片袖あるいは右片袖傾向の両袖、丹波北・西部では左片袖の石室が確認されている。

（３）畿内型石室

導入期の畿内型石室は広範囲に分布するが、その多くは山城に位置する。特に、ＭＴ15型式期に比定される確実な石室は、現状では芝１号墳と車谷２号墳など山城のみに分布する。ＴＫ10型式期以降になると、丹波・丹後でも畿内型石室が築造される。丹波北部の綾部・福知山市域では畿内型石室が複数確認できるものの、丹波南部では玄室方形プラン、丹後では竪穴系横口式石室が複数分布している。

第２図を見ると、玄室長3.1～5m付近、同幅1.4～2.5mまでの範囲、玄室幅：長さ＝１：２付近に点在する。最大長の長者森古墳は、確実な出土遺物が確認できず、両袖式の平面形となることや袖部の形状から、当該時期よりも新しい石室となる可能性がある。このことも勘案すると、玄室長4.2m以上、幅1.7m以上の大型の石室は山城に集中する傾向が指摘できる。

細部を見ていくと、山城では袖部の方向に地域ごとの差が認められる。右片袖は乙訓とその影響を受けた山科・宇治の地域に多く、左片袖は嵯峨野地域で確認できるというように、小地域ごとに明確に相違する状況が見られる。(注2) このような袖部の傾向は、前述の玄室方形の石室についても認められる特徴である。丹波北部の福知山・綾部市域内に分布する畿内型石室については、長者森古墳の玄門部やキツネ塚古墳の狭小な袖部などに地域色が認められる可能性がある。

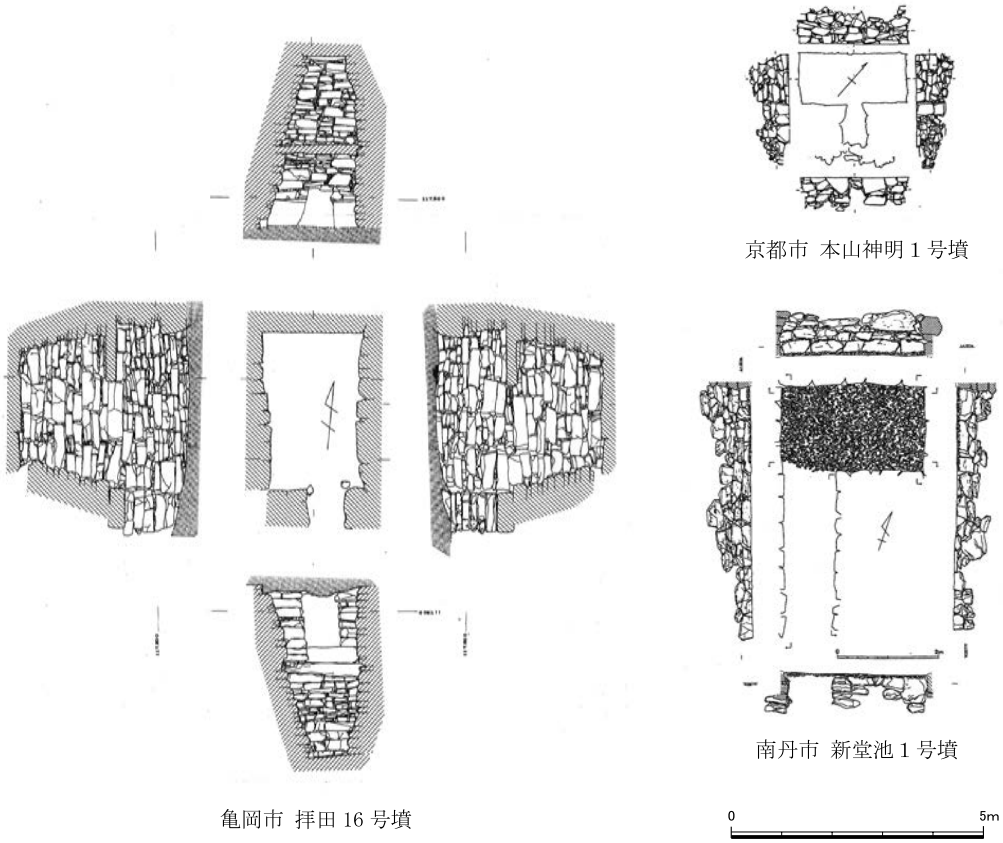
（４）その他の構造の石室

先に提示した３つの石室形態のほかに岩橋型、Ｔ字形、Ｌ字形の石室構造をもつ古墳が少数存在する。拝田16号墳は岩橋型と類似する石室構造をもつ（第６図）。この石室が位置する亀岡盆地にはＭＴ15型式期に北ノ庄14号墳など肥前から伝播したと考えられる石室が導入される。(注3) ＭＴ15～ＴＫ10型式期には石棚を持つ拝田16号墳など岩橋型の石室が採用される。また、医王谷３号墳など10m前後の円墳には、肥後型石室が畿内の影響を受けつつ築造されるようである。(注4) その後、

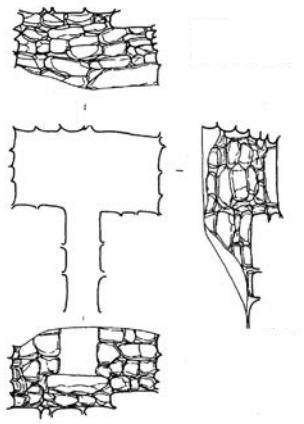
畿内あるいは紀伊の影響を受けた石室が築造されていく。

Ｔ字形石室は京都市岩倉に所在している本山神明１号墳に採用されている（第６図）。Ｔ字形の横穴式石室は、滋賀県、和歌山県などに分布している。最も近くに立地している大通寺18号墳や穴太大谷14号墳などと比較すると小さく、春日山D13号墳（玄室長1.6、玄室幅5.1m）や裳立山33号墳（玄室長1.1、玄室幅2m）、桜生13号墳（玄室長1.6、玄室幅3.5m・野洲市）などに類似している（第７図）。また持ち送りが明確に認められることから、穹窿頂持ち送り式石室の系譜にのる可能性がある。しかし、平面プランを観察すると、大通寺古墳群は玄室長・幅の比が１：1.1～1.2、春日山D13号墳では１：３、裳立山33号墳、桜生13号墳は１：２と玄室長と玄室幅ではその比率が若干異なることが分かる。本山神明１号墳は１：２の比率のプランを呈しており、裳立山33号墳、桜生13号墳が類似値を示す。１：２の比率の石室は広島県、和歌山県を中心に分布しているが、築造時期が異なるため、比率による類似性は、伝播と採用にはさほど影響していないと考えられる。(注5) 本山神明１号墳周辺では、発掘事例が少ないことからはっきりしたことは不明であるが、30基程度の古墳が存在するようで、2012年の調査では７世紀中頃と考えられる右片袖の横穴式石室が確認されていることから、Ｔ字形石室はさほど興隆せずに畿内型石室が分布していると考えられる。(注6) また府内においても多く築造されていないことを考えると、周辺で最も古い大通寺C-２号墳など滋賀里系の影響を受けつつも独自に単発的に築造されていたと考えられる。

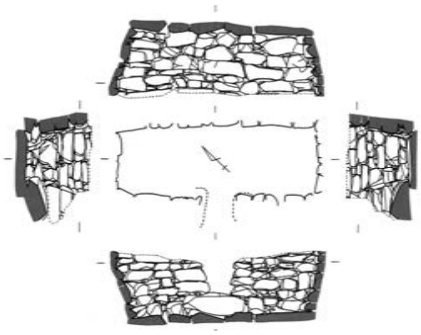
新堂池１号墳はＬ字形の平面形態を呈している。「Ｌ字形石室」という石室形態は方形プラン、



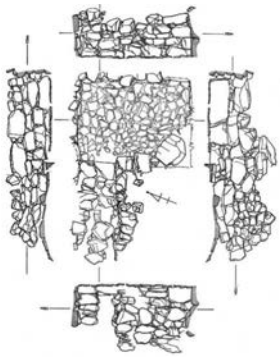
第６図　導入期におけるその他の横穴式石室図



滋賀県野洲市 桜生13号墳



滋賀県大津市 春日山D13号墳



滋賀県長浜市 四郷崎４号墳

0　5m

第７図　府外におけるＴ字形・Ｌ字形横穴式石室図

Ｔ字形石室との関係性、前後関係など議論が必要であることには留意しつつ、多少の検討を進める。まず同一古墳群内にある新堂池２号墳は方形プランの石室であると考えられ、１、２号墳ともに初葬時の須恵器はＴＫ10型式である。石室石材の大型化から１号墳がやや後出すると考えられ、突発的にＬ字形の石室が採用されたようである。(注7) 明確なＬ字を呈する石室は府内に類例を求めることは難しく、それらしい事例として四郷崎４号墳（長浜市）が挙げられる（第７図）。同古墳の規模は、墳丘直径18m、玄室長2.3m、玄室幅３ｍを測る。出土した須恵器から初葬時期はＭＴ15型式に比定され、石室も一部大型石材の利用が認められることから新堂池１号墳と比べ、若干先行するかほぼ同時期に築造されたとみていいだろう。(注8) 平面プランを見てみると、新堂池１号墳の方が若干、幅が広く１：1.6という比率を示す。互いに下段２石目から内側にせり出す様相を示すことから持ち送りが認められる。持ち送りは新堂池２号墳で認められる。ただ、四郷崎４号墳の石室は左に若干の袖部をもつことから、Ｔ字形石室の一部として認識することもできる。「Ｌ字形石室」は石室系譜の１つとすることは難しく、偶発的に発生した石室形態として考えた方が現状では無難であろう。

おわりに

今回、導入期の横穴式石室墳に関して分布域、石室形態から見る地域性などについて検討を加えた。丹後・丹波・山城において導入期に採用する石室はバラエティに富む。これまでの研究成果をまとめ直す程度であったが、丹後は竪穴系の石室墳が先行し、丹波では方形の石室墳、山城では畿内型石室墳が先行することがわかった。これについては石室がどのようなルートを経て供給され、採用されたかによるものと考えられる。丹後地域は導入期については中央からの影響を直接的には受けておらず、むしろ交易的、流動的集団の動きの中で横穴式石室が伝播・採用されていたと考えられる。石室規模が規格性が認められないことは、伝播の過程の中で変容が生まれた可能性がある。また平面形態や各部構造の特徴ごとにグループ化できる様相が認められることから、個々の石室の特徴や副葬品なども併せて詳細に分析する必要性がある。なお竪穴系横口式石室の伝播は近江湖東・湖

西地域でも散在していると指摘があることから、同じような集団が近江にも流入していたと考えられる。丹波地域では方形プランの採用が強く認められ、肥後や紀伊など一定の地域の特色を見出すことができる。平面プランは近似するものの、細部の構造について個々の石室で異なる要素が確認できる。平面プラン、石室規模などの共通性は一定の工人集団が、丹波地域に関わりをもっていたことを示唆し、その中で地域色が合わさることで、同一構造の中にバラエティが生まれていったと考えられる。周辺の集落遺跡や特徴的な出土遺物など石室以外の古墳を構成する諸要素や遺跡の動態とも比較して、地域全体でどのような特徴があるのか考える必要がある。さらに方形プランの石室は、さほど南に広がりを見せずに近江に伝播していることも興味深い。山城地域では、石室導入時から畿内形の影響を受けていることは明らかで、古墳以外にも、大和との位置関係や渡来系集団の存在など様々なことに起因していると考えられる。ただし、相楽郡の一部地域で竪穴系横口式石室の可能性のある古墳が認められることは大和以外すなわち近江からの影響も考える。(注9)

今回、京都府全域を対象としたために、他地域(九州、紀伊など)との関係性にまで広げることが出来なかった。府内での導入期も横穴式石室について多少ではあるが、再整理することできた。今後は「九州～日本海沿岸～丹後」、「九州・紀伊～丹波～近江」など伝播ルートを推定しつつ、地域間交流、周辺遺跡、平面形態や各部構造など石室の特徴や副葬品なども併せて詳細に分析する必要性がある。

次の方々と各機関には、各古墳石室の実見調査や資料集成等について多大なご配慮・ご協力を頂きました。末筆でありますが、厚くお礼申し上げます。

細川康晴　美浦雄二　妙正寺　唐津市教育委員会　福知山市教育委員会

（たけむら・かつひと＝当調査研究センター調査課第２係調査員）

（あらき・せな＝当調査研究センター調査課第１係調査員）

【石室図面】

以下の文献より、転載、加筆を行っています。

大野 嶺夫　1986「岩橋千塚と周辺のＴ字形横穴式石室（下）」『古代学研究』第110号

熊井 亮介　2018『芝古墳(芝１号墳)調査総括報告書』京都市文化市民局

2007『近畿の横穴式石室』　横穴式石室研究会

注１　富山直人　2017『古墳時代社会の比較考古学』同成社

細川康晴　1996「丹後地域における導入期横穴式石室の系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

注２　丸川義広　1989「付章　横穴式石室平面形態の分析」『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第８冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

注３　丸川義広　1998「横穴式石室平面形態の検討補稿」『研究紀要』第５号　財団法人京都市埋蔵文化

財研究所

注４　土井孝則　1998「口丹波における導入期の横穴式石室について」『第25回企画展　横穴式石室のはじまり―口丹波を中心に―』亀岡文化資料館

土井孝則　2001「南丹波における横穴式石室の導入について」『花園大学考古学研究論叢』花園大学考古学研究室

注５　大野嶺夫　1986「岩橋千塚と周辺のＴ字形横穴式石室（下）」『古代学研究』第110号

注６　辻　裕司　2012「本山古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2012-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

注７　竹原一彦・小池　寛　2003「新堂池古墳群第２次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

注８　田中勝弘・鬼柳　彰ほか　1976『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会

注９　太田浩明　2009『九州系石室の伝播・拡散の過程―畿内型石室の比較検討を通じて―』九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店

【その他参照文献】

高野陽子　2008「南丹波における石障系石室と隼人伝承　－城谷口２号墳の被葬者－」『史想』第23号　和田萃先生御退官記念号　京都教育大学考古学研究会

荻野谷正宏　2019「岩橋千塚における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』第219号

林日佐子　1988「丹後・丹波地域における初現期の横穴式石室」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

細川康晴　2001「丹後地域における畿内型横穴式石室の系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第４集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

細川康晴　2003「南丹波地域の横穴式石室」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズⅧ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

細川康晴　2004「古墳時代後期の丹後」『京都府埋蔵文化財論集』第５集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

横穴式石室研究会　2007『近畿の横穴式石室』

※その他、各古墳の報告書等を参考にさせて頂きましたが、紙幅の都合上、割愛させて頂きます。

研究ノート

西外古墳群の研究（上）

桐井理揮・肥田翔子・木村結香

１．はじめに

西外（にしがい）古墳群は、京丹後市大宮町三重小字西外に所在し、３基からなる古墳群である。これまで発掘調査は行われていないが、採集された遺物が京都府立丹後郷土資料館に寄託されており、その様相を知ることができる。中には金銅装の馬具など近畿北部では類例の少ない遺物も含まれ、当地域の歴史を考える上で極めて高い価値を有することは間違いない。しかしながら、この資料は写真で紹介されたりすることはあっても、図化や具体的な検討が行われてこなかった。本号では、まず基礎資料として概要を報告し、次号以降に若干の検討を加えることとしたい。

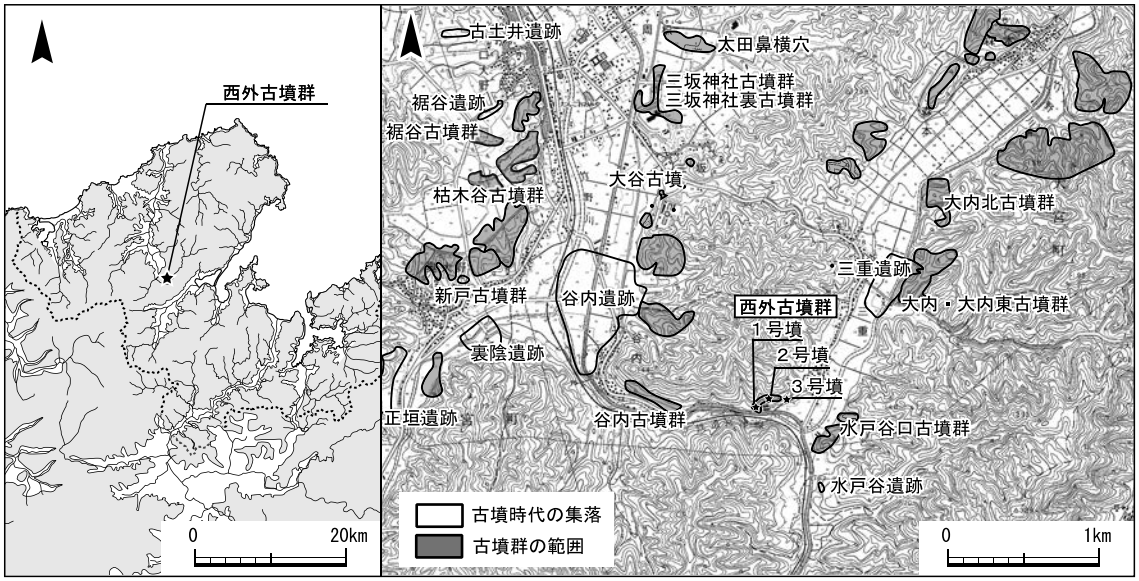
（桐井理揮）

２．西外古墳群をめぐるこれまでの経緯

（１）遺跡地図等での取り扱い

まずは、西外古墳群をめぐるこれまでの経緯をやや詳細に整理してみることにしよう。

1961年に発行された『京都府遺跡目録』は、府内で最初の悉皆的な埋蔵文化財包蔵地調査に基づいた遺跡目録である。(注1) 地図は付されていないため詳細は不明だが、付表①のように三重西外には(蝙蝠穴)として古墳の存在が記されている。蝙蝠穴古墳は『三重郷土志』にも「字谷内東方小字網掛の群墳にして俗に蝙蝠穴といふ」記され、古墳時代後期の須恵器高杯等が出土したようだ。(注2) しかし、郷土志によると、大正11年に破壊されたらしく、所在地も異なっていることから、この



第１図　西外古墳群の位置と周辺の古墳時代の遺跡

一覧表の記述にそぐわない点が多い。1972年の遺跡地図では、付表②のように(蝙蝠穴)の詳細な情報が削除されており、(蝙蝠穴)の記載は西外古墳群に関する情報とみてよいだろう。(注3)したがって、付表①に依拠すると、西外古墳群周辺での初めての古墳の発見は1951年ということになる。なお、西外所在の古墳として最初の記述は、1971年４月から京都府立丹後郷土資料館で開催された特別展図録『丹後の古墳』であり、峰山高校所有の「大宮町ニシガエ出土杏葉」が出品目録に記されている。(注4)1979年には裏陰遺跡の報告書の中で西外古墳出土馬具として写真①・③が紹介され、初めて写真付きで遺物の詳細が公表された。(注5)

1982年には峰山高校から他の資料とともに、西外古墳群の資料が丹後郷土資料館に寄託された。その際に作成された一覧表(付表③)では「西外１号墳」の出土品として詳細な内容が明らかとなった。(注6)しかし、同年に刊行された『大宮町史』の中には「馬具が多数出土した大宮町三重の西外二号墳」という記述があり、(注7)1971～79年の間に新たな古墳として西外２号墳が認識されたのだろう。前後の時期の遺跡地図から判断すると、付表③の記載は、付表②の１号墳・２号墳が混濁しており、館に寄託された資料は当初から、どちらの古墳に伴う遺物であるかは留意されなかったようだ。さらに、1988年には京都府遺跡地図の改訂が行われ、新たに西外３号墳の記述が追記されるとともに(付表④)、斧・須恵器杯・瑕が３号墳出土遺物とされ、(注8)西外古墳群は３基からなる群集墳と認識されることとなる。

1999年には悉皆調査の成果をもとに遺跡地図が改訂され、古墳群の現況や墳径が再確認された。この際、３基から構成されることは踏襲されたが、付表④とは２号墳と３号墳の記述が逆転することとなった。(注9)３号墳は「今回の調査で確認できず正確な位置不明」とされていることから、現状で確認することができた２基の古墳にそれぞれ番号を付し、馬具の出土が伝わる２号墳を３号墳と改訂したのだろう。その後の遺跡地図や『京丹後市史』でも、この記載が踏襲されている。

（２）資料の現状と出土古墳についての整理

現在、資料館で確認することができる遺物は、馬具を含む鉄製品が２箱と、土器類が３箱である。土器類は「三重村ニシガエ昭和十八年四月六日」と朱書きされたものと、墨で「西外２ 71.５」「西外２ 71.８」と書かれた一群があり、それぞれが別々のコンテナに収蔵されている。前者は、館の記録によると1976年に大宮売神社より寄託されたものである。古墳の発見以前に採集されたもので、どの古墳に伴うのかは不明だが、参考にはなろう。後者は峰山高校史学部が採集したものが中心と考えられる。ネーミングから判断すると多くは３号墳(当時の２号墳)に帰属する須恵器と考えておくのが妥当であろう。ただし、この中に、１・２号墳に本来伴っていた土器類が混濁している可能性も排除しえない。

鉄製品に関しては、遺物自体にネーミングがないため遺跡地図の記載に頼るしかないが、西外古墳群が知られるきっかけとなった鉄刀および鐘形鏡板・杏葉は１号墳に伴うものであろう。たほう、３号墳(当時の２号墳)については、遺跡地図の情報から推測すると、1971年に土器類とともに心葉形鏡板・杏葉などが採取されたと考えられる。これは、先述の『大宮町史』の記述とも合致する。また、1988年に遺跡地図に追記された２号墳(当時の３号墳)から出土したとされる斧

付表　遺跡地図等の遷り変り

①『京都府遺跡目録』（堤編 1961、注１文献）

遺跡番号	遺跡名称	遺跡の種類	立地	所在地	遺跡概要	出土品	現状	調査年月日 調査者	地図番号
	（蝙蝠穴）	円墳		中郡大宮町三重西外	昭和 26 年発見	須恵器、鉄刀 金銅鐘形鏡板			

②『京都府遺跡地図』（堤圭三郎編 1972、京都府教育委員会）

番号 府	町	名称	種類	所在地 大字	小字	遺跡の概要	出土品	文献	現状	地図
874	42	蝙蝠穴古墳	古墳	谷内	網掛	丘陵稜		56		図８
875	43-1	西外１号墳	古墳	三重	西外	丘陵端　径 10.0m、高 1.5m 横穴式石室　天井部および上半分は削平され、下部２～３段を残す	金銅製鏡板 須恵器、鉄刀		半壊	図８
875	43-2	西外２号墳	古墳	三重	西外	台地　墳形不明	馬具、杏葉		全壊	図８

③「峰山高校史学部収集の考古資料について」（安藤 1984、注６文献）

番号	遺跡名	所在地 （町名）（大字）（小字）	概要	品目	員数 点	箱数	文献	備考
37	西外１号墳	大宮町　三重　西外	丘陵端　横穴式石室	馬具（鏡板・杏葉他） 須恵器　平瓶 馬具一括	7 1	1		82・12 寄託

④『京都府遺跡地図 第１分冊（第２版）』（平良編 1988、注８文献）

番号	名称	種類	所在地 大字	小字	遺跡の概要	出土品	文献	現状	地図
43－1	西外１号墳	円墳	三重	西外	丘陵端　径 10m、高 1.5m 横穴式石室　側石露出	金銅馬具 刀、須恵器	1583	半壊	64
43－2	西外２号墳	古墳	三重	西外	丘陵端	馬具		全壊	図８
43－3	西外３号墳	古墳	三重	西外	丘陵端	斧、須恵器杯 ・瓶		全壊	図８

⑤『大宮町遺跡地図』（今田編 1999、注９文献）

番号	名称	種類	所在地 大字	小字	遺跡の概要	出土品	文献	地図	現状	
157－1	西外１号墳	円墳	三重	西外	丘陵腹　径 12m、高 1.7m 竪穴式石室？　側石露出	金銅馬具 刀、須恵器		4	半壊	43－1
157－2	西外２号墳	古墳	三重	西外	丘陵腹　径９m、高 1.7m 中央に既掘坑あり	斧、須恵器杯 ・瓶		4	半壊	43－3
157－3	西外３号墳	古墳	三重	西外	台地　規模不明 今回の調査で確認できず 正確な場所不明	馬具	14	4	全壊	43－2

は、現在１点のみ保管されている第７図65にあたると考えられる。以上のことから、帰属古墳について以下のように推測しておきたい。

１号墳：鐘形鏡板・杏葉、鉄刀、土器類の一部（1951年前後に採取か）

２号墳：鉄斧（1984～88年の間に採取か）

３号墳：心葉形鏡板・杏葉、環状轡等の馬具類、土器類の多数（1971年５・８月に採取か）

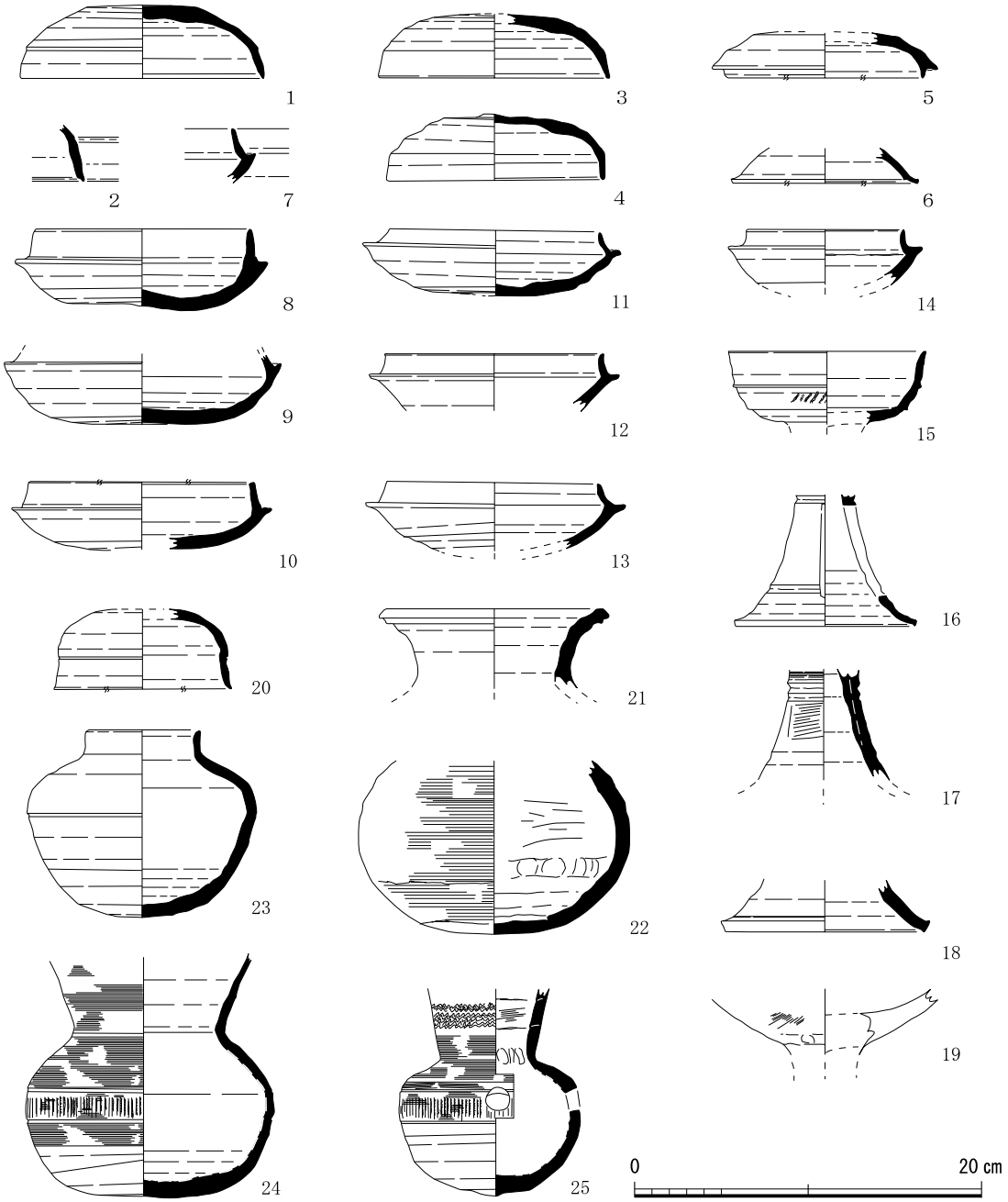
ただし、後述するように、遺物間にも若干の型式差が認められ、これも攪乱によるものなのか、追葬のためか、あるいは単純に記載のミスなのかもはっきりとしない。古墳の現況は３号墳が確認できず、１・２号墳についても半壊とされることから、推測に過ぎないということは強調しておきたい。しかし、基礎資料として可能な限り多くの遺物の図化を行った。　（桐井理揮）

３．出土遺物の概要

（１）土器類

第２図は、ネーミングから1971年に採取されたものである。「西外２ 71.５」「西外２ 71.８」の２種のネーミングが認められるが、一括して報告する。(注10)

須恵器杯・蓋類には蓋Ｈ（１～４）、杯Ｈ（７～14）、蓋Ｇ（５・６）がある。１、２、７は口縁端部に段を持つもので、１は天井部のみケズリが及んでいない。３･４は端部を丸く収めるもので、稜も不明瞭である。４は天井部にケズリが及ばず、側面にのみ僅かにケズリが認められる。５・６は天井部を欠くが蓋Ｇである。７～14は杯Ｈである。８はやや深手で全体的に器壁が厚く、口縁端部は丸く収めるなどシャープさを欠く。９は口縁部を欠くが、やや大型に復元できる。天井



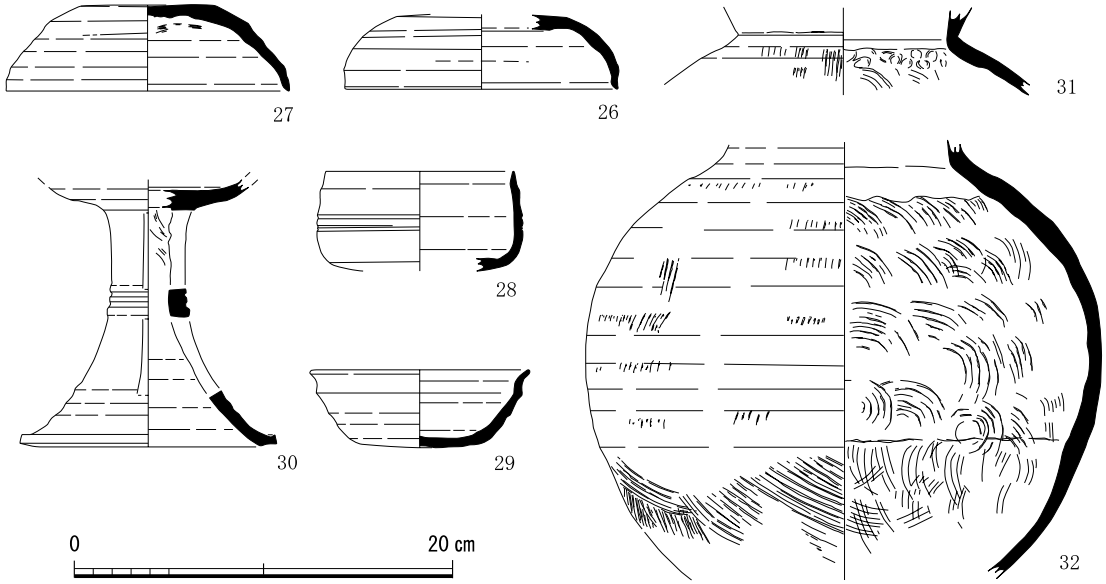
第２図　土器実測図①(1/4)

部にはケズリが及んでおらず､右回りのケズリが側面にのみ認められる。10は破片資料であるが、口縁端部が特徴的であるため、復元図化した。やや扁平気味の器形で、口縁端部は明瞭な面を持つ。14は復元口径が８cm台と小型の杯である。体部下半にはケズリが認められる。他のものと比して精良な胎土で丁寧に作られており、搬入品の可能性も考えられよう。

15～19は高杯である。すべて破片で、全形をうかがうことができるものはない。15は無蓋高杯の杯部であり、杯部下半には刺突文が施される。16は長脚高杯の脚部であり、本来は２段、３方向のスカシを持つものだが、１段目のスカシのみ残存する。17は脚柱部であり、ハケによる痕跡とカキ目が認められる。全周の１／３の破片だが、スカシは確認できない。18は脚裾部である。19は唯一図化可能であった土師器であり、高杯の杯部である。土師器の破片はほかにも数点認められるが、器種、器形が分かるものはない。

20は口径が小さい蓋であり､壺蓋と考える。内面はナデの凹凸が横方向の調整で消されるなど、丁寧に作られている。21～25は容器類である。21は広口壺の口縁部である。器壁は厚く、強い回転ナデの痕跡が顕著に残る。22は外面にカキ目が残る体～底部の破片である。底部は粘土充填が認められ、外面には同心円状のカキ目が施される。全形をうかがうことは難しいが、横瓶、あるいは提瓶が復元の候補となる。24は長頸壺である。平底の底部には右回りのケズリ、体部から頸部にはカキ目が認められる。胴部にはカキ目を切るようにハケ状工具による刺突がみられる。25は瓾である。底部は右回りのケズリ、体部から頸部下位まではカキ目が認められ、頸部上位には稚拙な波状文が施される｡胴部にはカキ目を切るように２条の沈線で画された刺突文がみられる。24・25は調整や施文が酷似しており、製作時の共通性が看取される。

第３図は「三重村ニシガエ昭和十八年四月六日」と朱書きされた一群である。26・27は須恵器蓋Ｈである。28は体部中位に２条の沈線を持つもので、金属器模倣の椀、あるいは盌の可能性もある。29は外反する端部を持つ杯であり、底部はやや平底気味になる。30は長脚で２段のスカシ



第３図　土器実測図②(1/4)

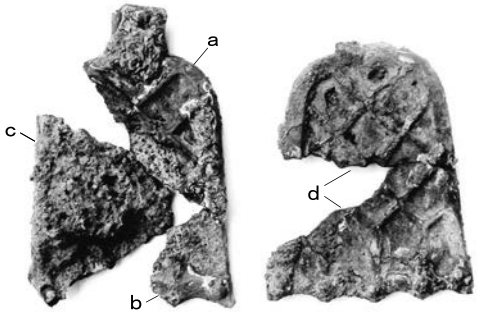
を持つ高杯である。破片資料であるが、３方向スカシに復元できる。31は甕の口縁部である。頸部直下には指頭圧痕が明瞭に残る。32は口縁部を欠くが、直口壺であろうか。外面上半は縦方向のタタキ痕がナデによって消されているが、下半には平行タタキが明瞭に残る。内面の当て具痕は接合痕を境に切り合い方向が変化している。

これらの帰属時期については、ＴＫ43～209型式並行期を中心とし、その前後のＴＫ10～ＭＴ15型式並行期、ＴＫ217型式～飛鳥Ⅱ並行期も含まれるなど、やや時間幅をもつ。詳細については次号以降で言及することとしたい。

（桐井理揮）

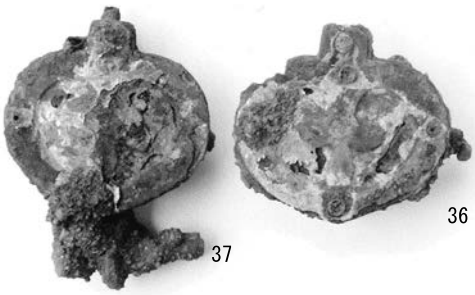
（２）馬具

現在確認できる馬具には轡、杏葉、辻金具、飾金具、鐙、鉸具等があり、総点数は39点である。保存処理を経て本来の形状が判別しがたい状態の遺物もあるが、処理前の写真との比較等から、現状と異なる器種認識や個体数とみなしたものもある。具体的な検討内容は文中に記した。



写真①　鐘形（表面）

写真②　鐘形（裏面）



写真③　心葉形鏡板（表面）

写真④　心葉形鏡板（裏面）

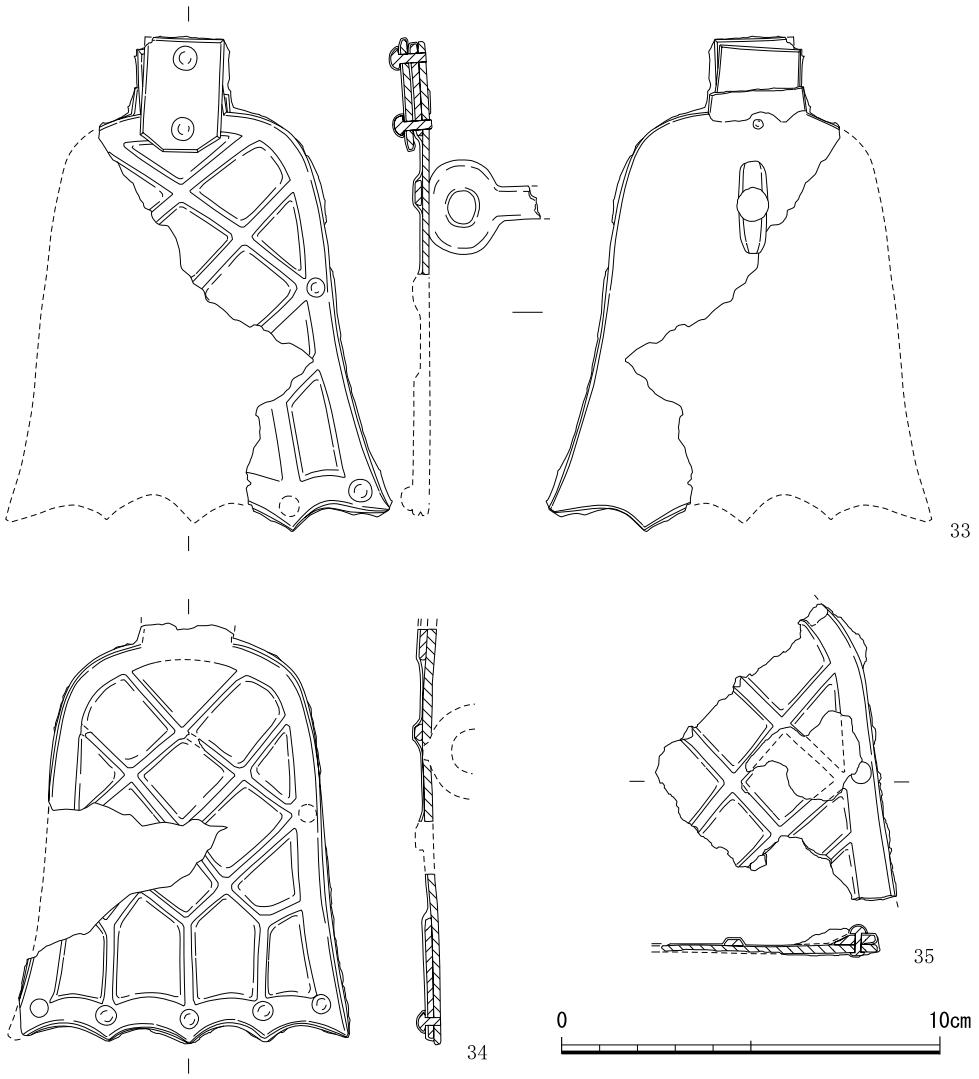
写真⑤　心葉形杏葉（表面）

写真⑥　心葉形杏葉（裏面）

写真　保存処理前の馬具（京都府立丹後郷土資料館提供）

鐘形鏡板轡・杏葉(33～35)　鐘形の鏡板２点および杏葉１点がある。33・34は保存処理・復元され、35は未処理である。処理前の写真(写真①・②)と比較すると、33はａ・ｂ、34はｄと同一と考えられる。35はｃを180度回転すると一致し、35は鐘形の右肩部と認識できる。したがって、33とは別個体の杏葉と判断する。各個体に破損はあるものの、鏡板・杏葉の意匠・つくりは共通する。文様は斜格子状で、最下段では下部の突起と直線的につながる。つくりは鉄地板に鉄製文様板を置き、金銅板一枚被せで文様槌起した鉄地金銅張である。鋲も鉄地金銅張で、突起上５点と両側斜辺の中間に１点ずつ、縁金上に施される。

33は左半から中央部の大部分を欠損する。引手・銜はほぼ喪失するが、銜外環が鏡板裏面に直接鍛接された状態で一部残り、銜と鏡板地板とをかしめて固定する連結方法であることがわかる。遺存する立聞部はやや特殊で、矩形立聞に飾金具を重ね、鋲留で面繋と接続する。この飾金具も鉄地金銅張で、形状は爪形に近いが方形の２角を切り取ったようにやや角張る。裏面には飾金具を留めた鋲の跡が１点残る。34は左半一部と立聞部が欠損し、立聞部が33と同様に別金具を重ねた鋲留手法であったかは明らかではない。裏面には銜外環をかしめた際の凹みが残る。35は鐘形



第４図　鐘形鏡板轡・杏葉実測図(1/2)

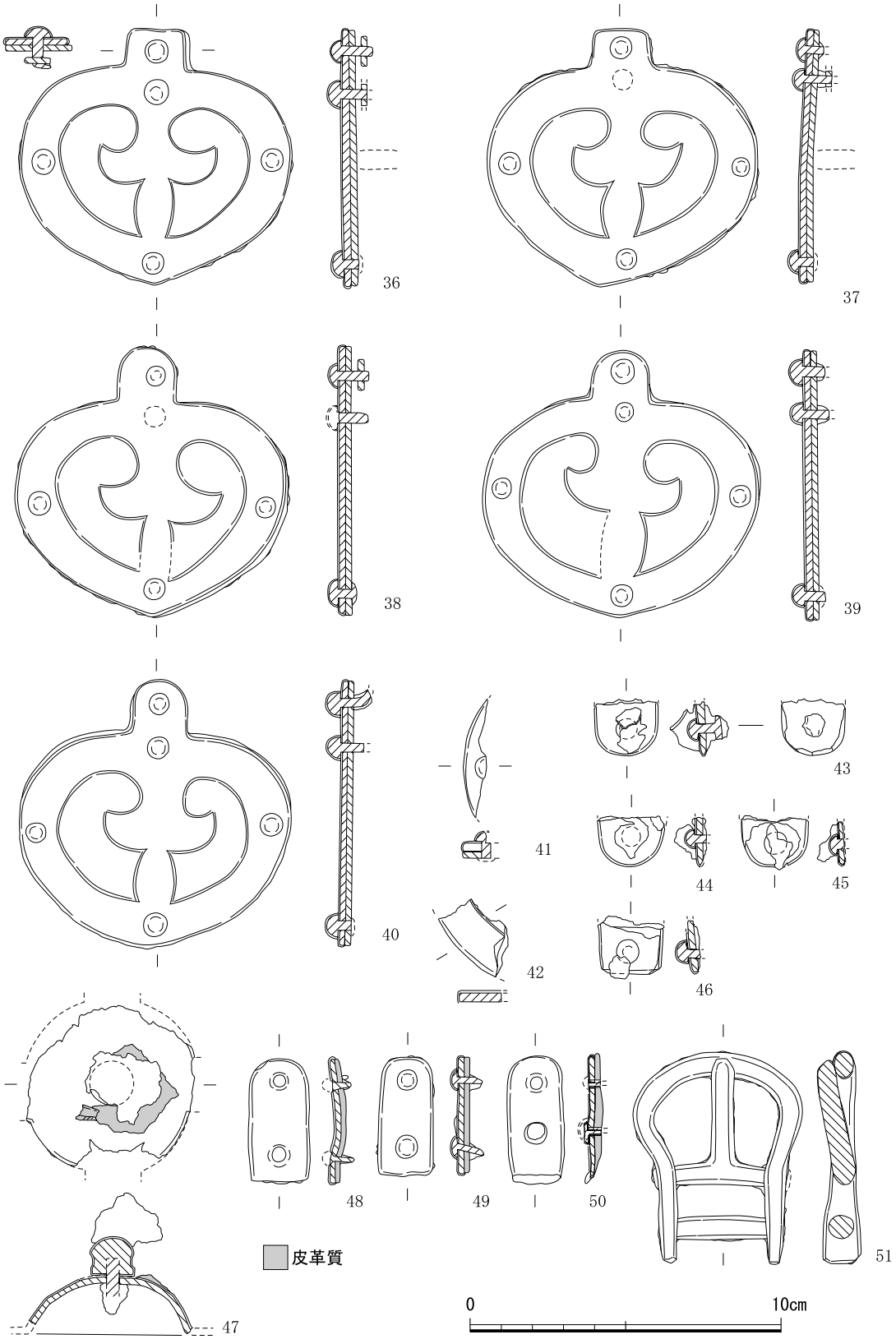
の右肩部の破片である。鐘形馬具における、内部文様の簡略化や縁金部への少鋲化、また鏡板・銜のかしめ連結の点より、TK209～217型式期に位置付けられる。

三葉文心葉形鏡板轡・杏葉(36～42)　現状では区別しがたいが、処理前の写真(写真③・④)を見ると、方形立聞のものには銜・引手が取り付いているため、立聞形状の差異より鏡板と杏葉の判別が可能と考える。したがって、36・37は鏡板、38～40は杏葉と判断した。轡１個体と杏葉３個体が確実にあり、41・42の破片が別個体であれば杏葉が少なくとも他に１個体存在した可能性がある。鏡板と杏葉の意匠・つくりは共通する。本体・鋲ともに鉄地金銅張で、本体は金銅板一枚被せ技法である。

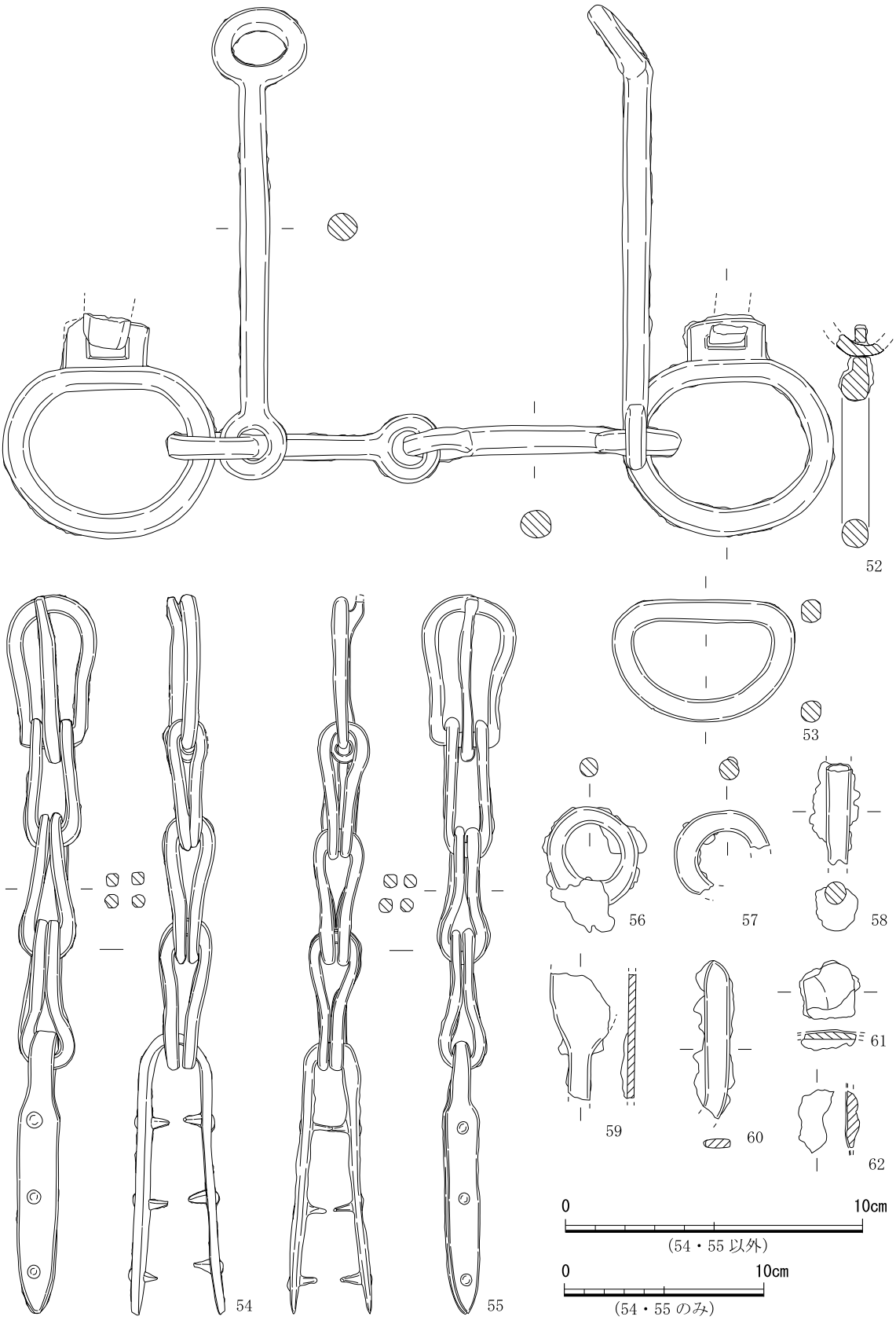
36・37は写真③・④より銜・引手が内側に連結していた様子がうかがえるが、現況では銜・引手ともに喪失している。詳細な連結方法は不明だが、鏡板には銜留孔がなく、表面に起伏などもみられないことから、銜外環を鏡板地板にかしめて固定したものと推定する。面繋への接続は上部の鋲２点で行う。これらの鋲脚は約１cm四方の方形鉄板を貫通しており、面繋を挟んで固定強度を保ったものとみられる。38～40は写真⑤・⑥の杏葉と一致する。38の立聞部の鋲脚には36・37と同様の方形鉄板がみられ、鏡板と同じ革帯接続方法が考えられる。41は現在補填で完形に復元されているが、図で示した部分のみ遺存していると判断した。42も縁金幅と湾曲具合より心葉形の破片と判断できる。41は38～40と別個体の可能性が高いが、42は別個体であるか、写真⑤の39の縁金剥離部分である可能性も考えられる。金銅板一枚被せや、面繋・革帯への鋲留接続などの点からTK209型式期後半～TK217型式期の年代が与えられる。(注11)

環状轡(52・53)　環状轡は完形の１点と、鏡板の可能性がある部品１点が認められる。52は現状では、鏡板・銜・引手が連結した完形品に復元されている。鏡板の矩形立聞にわずかに鉤金具破片が残存しており、鉤金具付小型矩形立聞式の環状轡と考えられる。引手は屈曲引手で、屈曲の角度は33度とやや浅い。53は鏡板の環部のみ遺存したものと推定する。矩形あるいは鉸具造の立聞が鍛接されていたと考えられる。52の鉤金具が取り付く型式はMT85～TK209型式期の時期幅が与えられ(注12)、53は幅６cm程の小型化した環部よりTK209型式期後半～TK217型式期段階の製品と考えられる。(注13)

辻金具、雲珠・辻金具脚(43～47)　47は鉄地金銅張の鉢状辻金具で、欠損が著しいが、鉢部径5.5cm、脚数は４つに復元できる。鉢部中位には稜が認められ、頂部には宝珠飾をもつ。宝珠飾は中位に凹部があり、鉢部に接する底面まで金銅張が施される。宝珠飾と鉢部とは鉄製の棒状部品で接続されたようである。鉢部上面には、皮革質と、繋縁飾と思しき残片が付着し、繋が重なり腐蝕したと考えられる。43～46は鉄地金銅張の雲珠あるいは辻金具の脚破片である。43～45は半円形、46は方形を呈し、脚幅は2.1～2.2cmである。鋲も鉄地金銅張で、すべて１点で留められる。43の鋲を覆う錆上に付着する金銅板は、別製品由来のものと思われる。裏面には鋲をかしめた痕跡が残る。責金具は痕跡や別離破片も存在せず、用いなかったものと考えられる。辻金具は有稜鉢や凹部のある宝珠飾などの特徴より、宮代栄一の雲珠・辻金具編年第Ⅶ期、TK217型式期に相当する。(注14)



第５図　三葉文心葉形鏡板轡・杏葉・革帯金具類実測図(1/2)



第６図　環状轡・木芯鉄板張壺鐙・馬具破片実測図(1/2・1/3)

鉸具(51)　51は鉄製鉸具で、現況完形で残るが、補填範囲は不明である。輪金にＴ字状の刺金と軸部を別材で取り付けている。

爪形飾金具(48～50)　鉄地金銅張の爪形飾金具が３点ある。いずれも裏面に皮革質と考えられる有機質が残る。49はわずかに鍍金が確認できる。鋲は２点留めで、鉄地金銅張である。

木芯鉄板張壺鐙(54・55)　木芯鉄板張三角錐形壺鐙の鉄部分が１組認められる。木製壺部を装着するための逆Ｕ字形金具に、鉸具と兵庫鎖３連が鐙鞋として伴う。逆Ｕ字形金具の左右には鋲が３点ずつ打ち込まれており、木製壺部を固定していたものと考える。斎藤弘編年の三Ｄ式に当てはまり、TK43～TK209型式期の時期が与えられる。(注15)

銜、引手か(56～58)　鉄製の銜または引手の環部と推定される破片２点(56・57)と、棒部分と推定される破片１点(58)がある。断面はいずれも正円形で、径0.6～0.7cmを測る。

鉤金具か(59・60)　鉄製の鉤金具の可能性がある破片が２点存在する。59は上方が幅広く下方が鉤部のように細くなる点、60は下端がやや屈曲し、断面が扁平である点から判断した。

不明鉄地金銅張破片(61・62・66)　馬具と考えられる鉄地金銅張の破片が３点確認できるが、種類や部位は特定できない。66は、現況では67の不明鉄製品の上部に接合されるが、材質が異なるため本来は別製品であった可能性が高い。形状と鋲孔の存在から、飾金具である可能性が考えられる。

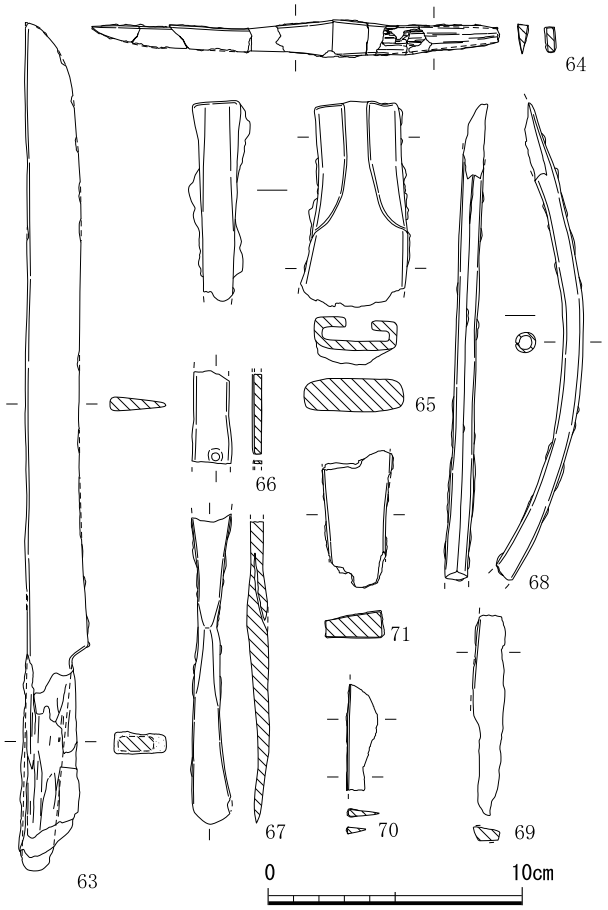
(３)その他鉄器類

刀(63)　完形の短刀で、全長33.6cm、刃部最大厚は0.6cmを測る。切先から関に向かって刃部幅が徐々に広がる形状で、関は肩関の斜角である。茎部には木質が残存する。現存する刀剣類はこの１点のみで、当初１号墳で採集されたものである可能性が高い。

刀子(64)　刃部・茎部の幅にほとんど差のない両関式の刀子である。補填はあるが、ほぼ完形で残る。刃部にはやや研ぎ減りがみられ、茎部には木質が残存する。

鉄斧(65)　65は無肩の有袋鉄斧である。袋部から刃部にかけて緩やかに広がる平面形状で、袋部の折り返しは両端が密着せず、「ハ」状に大きく開く。先述のように、２号墳に伴うものと考えられる。

不明鉄製品(67～71)　器種不明の鉄製品が５点ある。67は中央部分が「Ｈ」字



第７図　鉄器類実測図(1/3)

状に隆起するヘラ状の鉄製品の破片である。現況では66と接合しているが、本来は別製品であった可能性が高い。68は全体が弓状に湾曲する棒筒状鉄製品の破片である。厚さ0.2cmの鉄板の両端を丸め合わせ、筒状に成形している。69は両端を欠損する鉄製品破片である。70は片側が欠損し、薄くなった鉄製品破片である。71は断面台形状を呈する鉄製品破片である。

（肥田翔子・木村結香）

（４）小結

以上、資料館で現在確認できる西外古墳群出土資料を紹介した。各遺物の帰属古墳が必ずしも明らかでないうえ、鉄製品のレントゲン写真等を撮影することができなかったため、必ずしも十分な内容とはなっていないが、現状の事実報告としておき、次号以降で、具体的な古墳群及び遺物の位置付けを行うこととしたい。（桐井理揮）

（きりい・りき＝当調査研究センター調査課調査第１係調査員）
（ひだ・しょうこ＝堺市博物館学芸員）
（きむら・ゆうか＝奈良県立橿原考古学研究所技師）

注１　堤圭三郎『京都府遺跡目録』京都府教育委員会　1961
注２　三重郷土志刊行会編『三重郷土志』 1922
注３　なお、蝙蝠穴古墳は1972の遺跡地図では西外古墳のすぐ北の「谷内網掛」に位置が訂正されており、出土品も記されていない。1988の改訂以降は片袖の横穴式石室を持つ「谷内１号墳」と名称が変更されたようで、名称自体が削除されている。
注４　京都府立丹後郷土資料館編『丹後の古墳』1971
注５　杉原和雄ほか編『裏陰遺跡発掘調査概報』（大宮町文化財調査報告第１集　大宮町教育委員会）1979
注６　安藤信策「峰山高校史学部収集の考古資料について」（『丹後郷土資料館館報』第５号　京都府立丹後郷土資料館）1984
注７　大宮町史編さん委員会編『大宮町史』1982
注８　平良泰久編『京都府遺跡地図（第２版）』第１分冊　京都府教育委員会　1988
注９　今田昇一編『大宮町遺跡地図』（大宮町文化財調査報告第17集　大宮町教育委員会） 1999
注10　須恵器は以下の文献を主に参考にした。田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981／西弘海「土器様式の成立とその背景」（『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集）1982／新納泉「前方後円墳廃絶期の歴年代」（『考古学研究』第56巻第３号　考古学研究会）2009
注11　鈴木一有「原分古墳出土馬具の時期と系譜」（『原分古墳　調査報告編』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所） 2008
注12　大谷宏治「鋲留立聞環状鏡板付轡の意義」（『研究紀要』第16号　静岡県埋蔵文化財調査研究所）2010
注13　注11に同じ。
注14　宮代栄一「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」（『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会）1993
注15　斎藤　弘「古墳時代の壺鐙の分類と編年」（『日本古代史研究』第３号　PHALANX古墳文化研究会）1986

研究ノート

古墳築造終焉後の環状瓶（上）

名村威彦

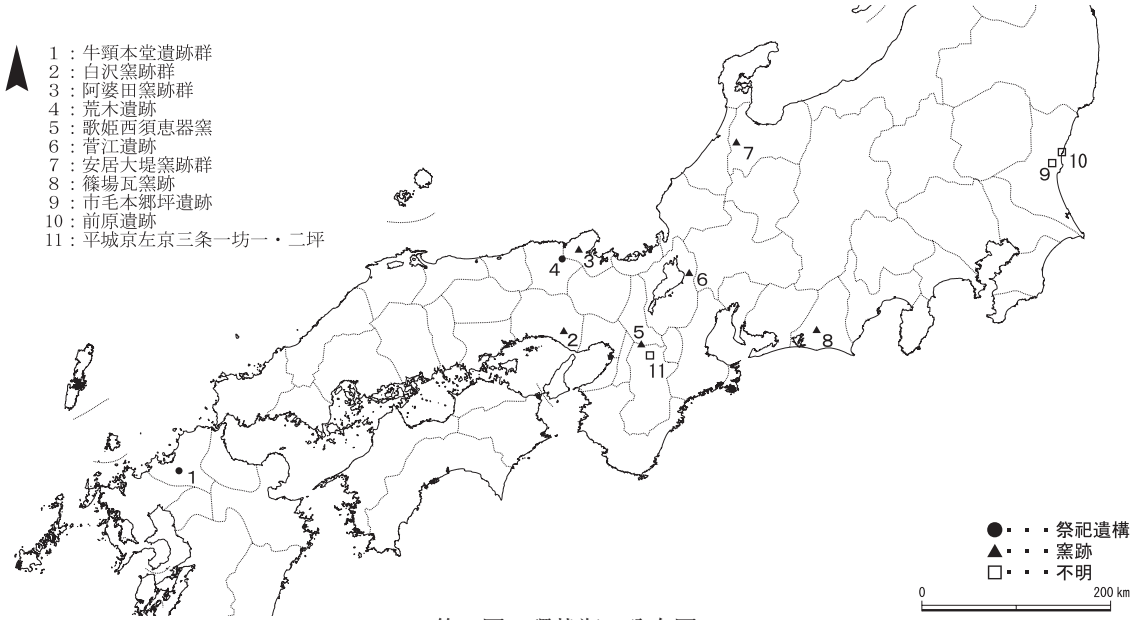
１．はじめに

須恵器には杯や甕のように大量に製作されるもののほかに特異な形態をもつものがある。これらは「異形須恵器」[注1]や「特殊須恵器」[注2]と呼ばれてきた。こうした須恵器は古墳時代後期を中心に副葬品として製作された地方色の強い須恵器と捉えられてきており[注3]、多くは古墳時代の終わりとともにその役目を終え、姿を消した。

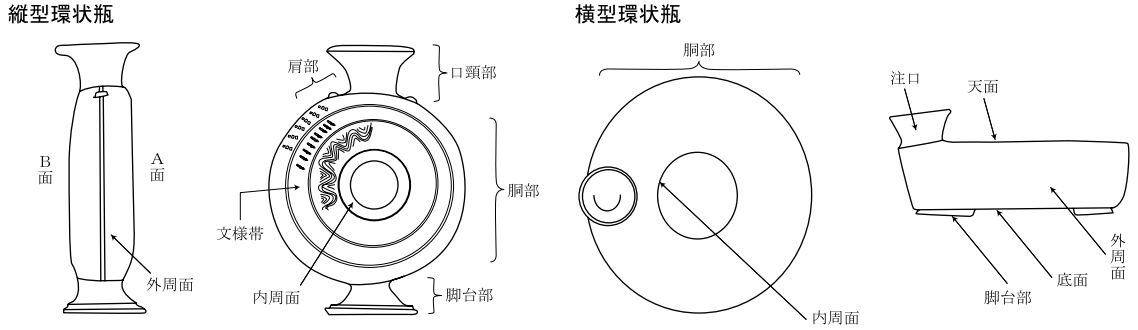
本稿で対象とする環状瓶もそのひとつである。環状瓶とは提瓶あるいは平瓶の胴部を環状に成形した須恵器であり、脚台部をもつものもある。６世紀末から７世紀初頭にかけての古墳時代終末期に副葬品として製作が始まった後、８世紀以降も製作され続けた[注4]。しかし古墳の築造が終わった後に副葬品以外の用途で製作された環状瓶についての性格は明らかではない。そこで京都府内でも出土しているこうした環状瓶について近年各地で確認されている例を挙げつつ、その用途や性格について推察してみたい。

２．環状瓶の諸例

本稿では７世紀後半以降に副葬品とは異なる用途で製作されたと考えられる環状瓶を対象資料とする。こうした環状瓶が出土した遺跡の所在地を令制国別にみると筑前国に１遺跡、播磨国に



第１図　環状瓶の分布図



第２図　環状瓶各部名称

１遺跡、但馬国に１遺跡、大和国に２遺跡、丹後国に１遺跡、近江国に１遺跡、越中国に１遺跡、遠江国に１遺跡、常陸国に２遺跡である（第１図）。

環状瓶には提瓶の胴部を環状にしたタイプと平瓶の胴部を環状にしたタイプがある。それぞれ縦型環状瓶、横型環状瓶と呼称し、その各部名称については第２図に示す。文様が施される面については説明のため便宜的にＡ面とＢ面を設定している。なお文様帯とは同心円状に施された文様が突線や沈線などの区画線や無文帯で区画される範囲とし、外側から順に数字を与えて区別する。

また、環状瓶の製作時期の検討に用いた編年は、九州地方については『牛頸窯跡群―総括報告書Ⅰ―』(注5)を参考に牛頸○期と記し、静岡県については『梶子北遺跡　遺物編（本文）』(注6)を参考に遠江○期、その他は『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(注7)、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(注8)および『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』(注9)を参考に飛鳥宮○、平城宮○と記し、各文献の記載に基づいて暦年代を示した。

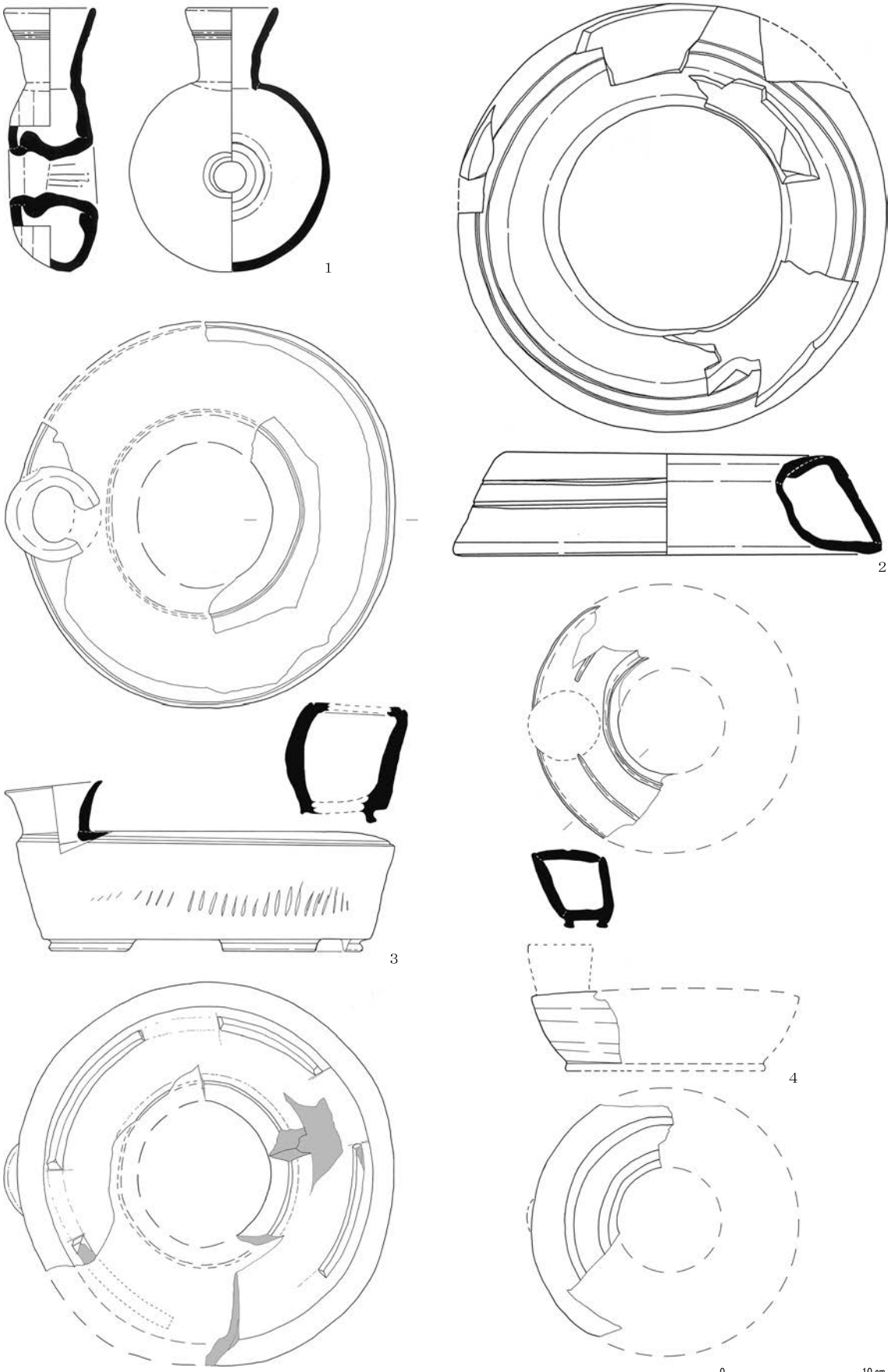
なお、資料的制約から製作時期を検討できなかった資料については報告書等の記載に基づいて年代を示した。

（１）牛頸本堂遺跡群(注10)

福岡県大野城市上大利に所在する古墳時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、福岡平野を北流する御笠川の左岸に点在する丘陵上に位置する。丘陵上部と谷部が調査されており、丘陵上部では建物群が検出され、谷部では包含層から土師器や須恵器などの土器、斎串などの木製品が出土した。谷部西側のＡ区５層からは牛頸ⅣＡ期から牛頸ⅦＡ期までの須恵器が出土しており、環状瓶もその中の一つである。

胴部の半分ほどが欠損しているが全形がわかる縦型環状瓶である（第３図１）。口頸部は外面に２本の浅い沈線が施される。Ａ面、Ｂ面ともに胴部は外面に回転ケズリが施されており、内面は回転ナデが施される。内側面はＢ面寄りの外面に補強粘土がナデツケられており、内面には回転ナデが確認できる。内側面の内面にはＡ面側、Ｂ面側ともに製作時の粘土接合痕が顕著に残されているが、Ａ面側の接合痕が整っているのに対しＢ面側の接合痕は粗く亀裂もみられる。胴部断面形は隅丸三角形である。焼成は良好である。胎土はやや粗く、２mm前後の白色長石を多数含む。

包含層出土資料のため製作時期を決定することは難しい。報告書によると環状瓶が出土した５層は灰層で、焼け歪みのある須恵器片が多数出土することから須恵器窯操業にかかわる堆積層とみられている。５層における出土遺物の製作時期は牛頸ⅢＡ期から牛頸ⅦＡ期まで幅広いが窯の



１：牛首本堂遺跡群　２：白沢窯跡群　３：阿婆田窯跡群　４：荒木遺跡

第３図　環状瓶（１）（Ｓ＝1/4）

中心的な操業期間はⅢＢ期からⅣＡ期頃とされる。牛頸編年では提瓶は牛頸ⅣＢ期までは確認できることや、口頸部に沈線が２本施される須恵器が牛頸ⅣＡ期・ⅣＢ期に多いことから環状瓶も当該時期に製作されたと考えることもでき、想定される窯跡の中心的操業期間とも近い。ただ、筆者の観察では環状瓶に関しては焼成が良好で焼け歪み等の不良はみられず、窯業における失敗品とは考えにくい。環状瓶の型式変化と照らし合わせると胴部断面形や文様構成の点からはもう少しくだった時期の製作と考えるほうが整合的でもある。(注11)

恣意的であるとの誹りは免れないかもしれないが牛頸ⅦＡ期ごろに製作された可能性もある例として挙げておきたい。

（２）白沢窯跡群(注12)

兵庫県加古川市上荘町白沢に所在する。兵庫県中央を南流する加古川が大きく東に蛇行する中流域、右岸に位置する。白沢窯跡群は５基の窯跡が確認されており、その他に須恵器生産関連施設が想定される遺構群が検出されている。環状瓶は須恵器生産関連施設に伴うと考えられる溝から出土した。(注13)

環状瓶は胴部が遺存しており、横型環状瓶の可能性がある（第３図２）。外側面に２条の沈線がめぐらされるほかは無文である。胴部断面形は台形に近い。

環状瓶の製作時期は一連の遺跡と捉えられる白沢３・５号窯跡出土資料などから平城宮Ｉと考えられる。

（３）阿婆田窯跡群(注14)

京都府京丹後市大宮町に所在する奈良時代後半の窯跡群である。環状瓶が出土した阿婆田窯跡群Ｃ支群２号窯跡は３段の段を持つ半地下天井架構式有段窖窯である。(注15)窯体内から200個体におよぶ須恵器が出土した。

胴部上面が大きく欠損しているが全形が推定できる横型環状瓶である（第３図３）。胴部外側面の下位に斜線文が施されているが全周しない。胴部断面形は長方形である。脚台部は貼り付けによる輪状高台であり、４か所を刀子状の工具で切り取り、透かし様にしてある。

環状瓶の製作時期は共伴した須恵器から平城宮Ⅲ～Ⅳのものと考えられ８世紀第２四半期から第３四半期ごろのものと考えられる。

（４）荒木遺跡(注16)

兵庫県豊岡市出石町荒木に所在する。出石町北部を流れる小野川の左岸に位置しており、袴狭遺跡群を構成する遺跡の一つである。報告書が未刊行のため詳細は不明であるが袴狭遺跡群内でも古い時期の遺跡と考えられており、11棟の整然と並ぶ大型掘立柱建物跡や井戸などが検出された。８世紀前半頃から９世紀にかけての集落跡で官衙的性格の強い遺跡である。

環状瓶は口頸部付近の胴部が一部遺存する横型環状瓶である（第３図４）。天面に浅い沈線が１条めぐらされている他は無文である。胴部の断面形は斜めに傾いた四角形を呈す。脚台部は輪状高台が外側面側と内側面側にはりつけられており、切り離しはみられない。焼成はやや悪い。胎土に２㎜前後の白色長石をまばらに含む。

環状瓶の製作時期は遺跡の存続年代から８～９世紀代のものと考えられ、環状瓶の型式変化からは８世紀中葉を前後する時期のものと考えられる。

（なむら・たけひこ＝当調査研究センター調査課調査第３係調査員）

注１　後藤守一 「須恵器」（『陶器講座』 第１巻　雄山閣） 1935、１～50頁

注２　柴垣勇夫 「特殊須恵器の器種と分布」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』６　愛知県陶磁資料館） 1987、11～27頁

注３　横山浩一 「土師器と須恵器」（小林行雄編『世界考古学体系』日本Ⅲ　古墳時代　平凡社） 1959、125～144頁、など。

注４　名村威彦「環状瓶の製作技術とその系譜」（『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第９号　広島大学大学院文学研究科考古学研究室） 2017、25～42頁

注５　舟山良一・石川　健『牛頸窯跡群―総括報告書Ⅰ―』（『大野城市文化財調査報告書』第77集　大野城市教育委員会） 2008

注６　鈴木敏則「古墳時代～律令時代の土器」（『梶子北遺跡　遺物編（本文）』 浜松市教育委員会） 1998、43～62頁

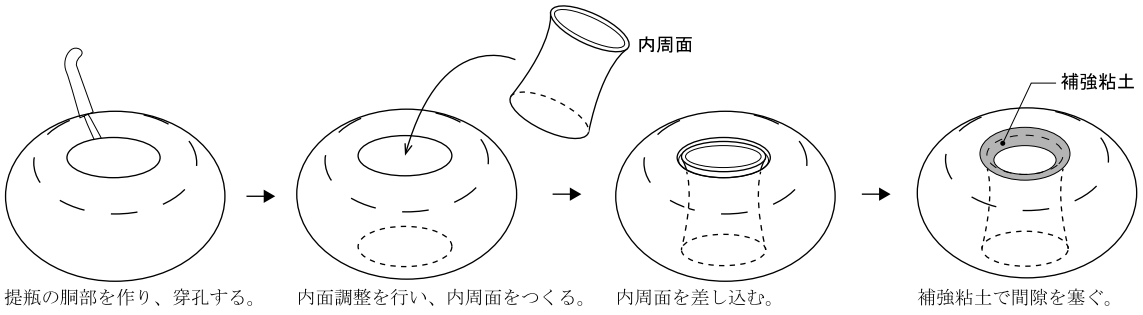
注７　西　弘海「土器の時期区分と型式変化」（『飛鳥･藤原宮発掘調査報告Ⅱ　藤原宮西方官衙地域の調査』　奈良国立文化財研究所学報第31冊　奈良国立文化財研究所） 1978、92～100頁

注８　西　弘海「平城宮I～VIIの大別」（『平城宮発掘調査報告VII』 奈良国立文化財研究所学報第26冊　奈良国立文化財研究所） 1976、139～149頁

注９　巽淳一郎「平城京土器の大別」（『平城宮発掘調査報告XIII』 奈良国立文化財研究所学報第50冊　奈良国立文化財研究所） 1991、375～383頁

注10　石木秀啓・大里弥生・中島　圭・遠藤　茜『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』（『大野城市文化財調査報告書』第81集　大野城市教育委員会） 2008

注11　筆者は注４文献において環状瓶の胴部製作技術を検討したが、牛頸本堂遺跡群例については筆者の不注意から対象にできておらず、注４文献で提示した製作技術に該当するものがない。牛頸本堂遺跡群例の場合、まず提瓶の胴部を製作した後に胴部中央に刀子などの工具で穿孔を行い、別に製作した内周部分を差し込むように接合している。内周部分が別づくりであるため接合時に隙間ができてしまっており、補強粘土によってそれを補っている。この胴部製作技術と注４文献で示した他の例との技術系譜については明らかにできていない。製作技術の系譜が異なることから一概には言えないが、胴部断面形や文様から製作時期を比較すると、胴部断面形については稜が認められる隅丸三角形であり、７世紀代の環状瓶のように円形ではないこと、底部は丸底であるが、胴部は無文で



付図　牛頸本堂遺跡群出土環状瓶の製作技術

肩部の把手の名残は消失していることなどは８世紀以降の環状瓶と共通性が多い。

注12　森内秀造・深江英憲『兵庫県加古川市　白沢３・５号窯』（『兵庫県文化財調査報告』第184冊　兵庫県教育委員会）　1999

注13　白沢窯跡群の資料は製作技術および形態から環状瓶と判断したが、口頸部が確認できないため環状瓶とは異なる器種である可能性も考えられる。

注14　森　　正　「阿婆田窯跡群」（『京都府遺跡調査概報』第44冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991、３～39頁

注15　窯構造の分類については窯跡研究会によって設定された名称（森内秀造　「窯構造の分類」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』　窯跡研究会　2010、25～40頁）を参考にした。

注16　藤田　淳編　『砂入遺跡』　兵庫県文化財調査報告第161冊　兵庫県教育委員会　1997、なお環状瓶の実見にあたっては豊岡市教育委員会教育総務課文化財室・豊岡市歴史博物館―但馬国府・国分寺館―学芸員の仲田周平氏にお世話になりました。記して感謝いたします。

〈図版出典〉

第１図・第２図：筆者作成

第３図１：注10文献より引用

２：注12文献より引用

３・４：筆者作成

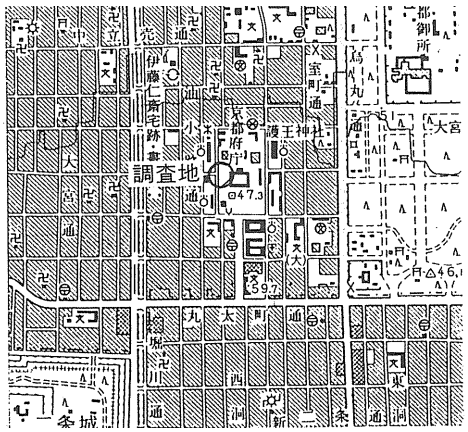
研究ノート

左京近衛・西洞院辻の町家について

加藤雄太

1．はじめに

今回は1989年に報告された平安京（左京近衛・西洞院辻）発掘調査の成果から検討を加える。(注1) この調査は左京近衛・西洞院の道幅や側溝の変遷の追える事例として挙げられるが、近世の遺構面においては町家由来とおぼしき遺構がみつかっている。この調査成果をもとに、近世の町家構造を検討したい。

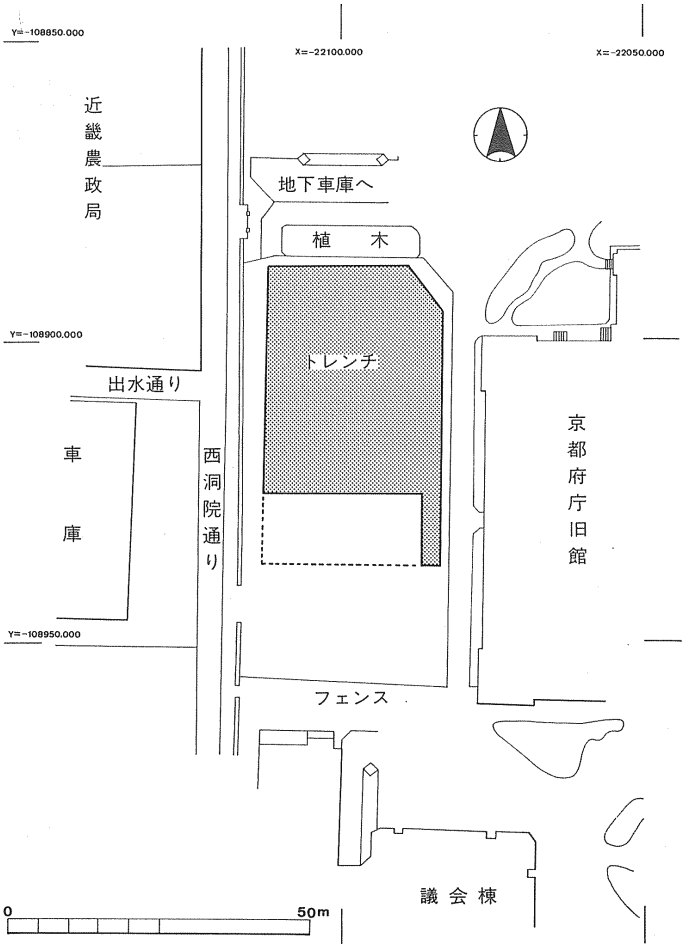


第１図　調査地位置図(1/25,000)

2．概　要

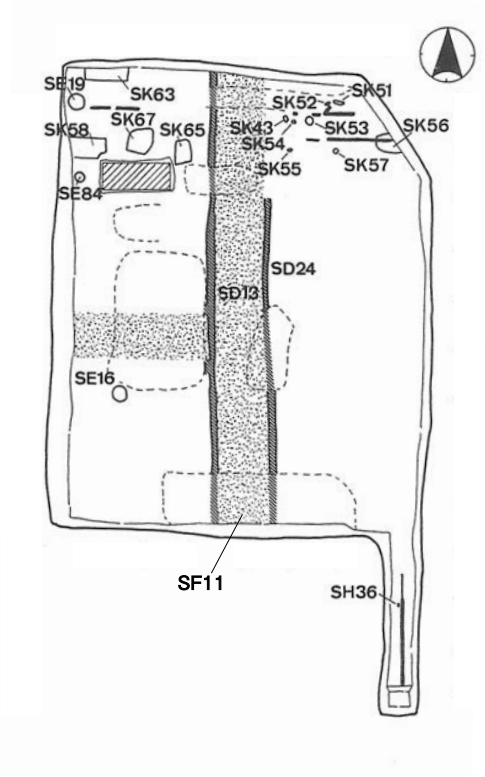
調査地は報告によると平安時代には南北方向の道路である西洞院大路と東西方向の近衛大路の交差点（辻）にあたる。調査地のほとんどは路面と推定されているが、四隅に関しては交差点を取り巻く四つの町の一部であった。西北が左近町、西南が左獄、東北が右衛門府（町）、東南が修理職であった。中世には付近に下御霊神社があったが、天正18（1590）年に豊臣秀吉の都市改造によって移転したという。

江戸時代になると、調査地の西北隣に茶屋四郎次郎の屋敷が造られた。江戸時代の末期には会津藩主の松平容保が京都守護職に任じられたが、それに伴って、現京都府庁敷地一帯を幕府が買収し、その役邸にあ



第２図　トレンチ設定図

てた。慶応３(1867)年に守護職が廃止され、跡地は一時期京都裁判所に引き継がれたが、明治２(1869)年に京都府庁が、同４年に京都中学校、同18年に再び府庁の地となり、現在に至っている(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989、以下の記述では、京都府埋文センターと呼称する。)



第３図　調査地主要遺構図(S=1/600)
(江戸時代18世紀)

写真１　調査地北東部(南から)

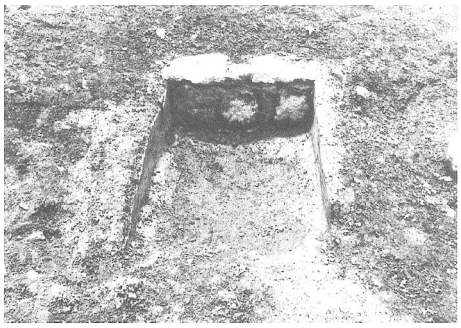


写真２　漆喰の構造物(第４図-①)

３．調査地平面プランについて

報告によると江戸時代は幕末、安政の大火(1854年)面、天明の大火(1788年)面、江戸時代前期面の、少なくとも４面あることが指摘されている。このうち、町家が建ち並んでいた時期の安政の大火と天明の大火の面にて漆喰構造の遺構が確認されており、これら漆喰構造の遺構から町家の復元を試みる。

なお、検討にあたっては、より良好に残存する天明年間の遺構を中心に考えていく。

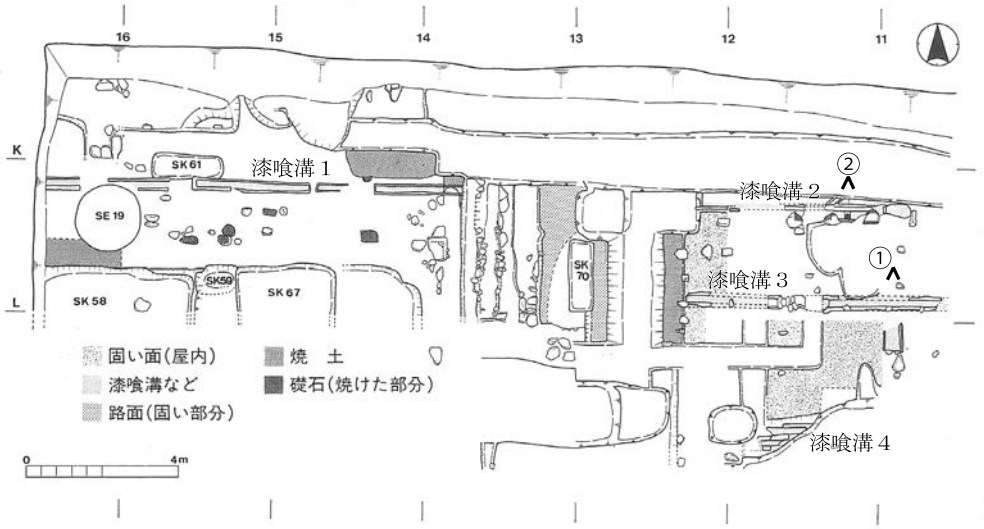
第３図は調査地のうち、18世紀の主要遺構を示した図である。調査地を南北に横切るトーンの掛けられた範囲がＳＦ11と呼称される路面にあたり、その西側から延びる路面が東西の路面の出水(近衛)通にあたる。南北の通りであるＳＦ11は西洞院通にあたる。

西洞院通には側溝が敷設されており、西側にＳＤ13、東側にＳＤ24が残存していた。ＳＤ24は北側に限れば、残存状況に恵まれなかったが、ＳＤ13の状況から西側溝は石組の側溝であったと考えられる。

今回の検討範囲は調査地内、北部に限られる。その範囲で西洞院通から東西にのびる漆喰溝が第３図では３本確認できるが、第４図では図の南端に重複する漆喰溝の痕跡が確認できる。

また、漆喰溝には別の漆喰構造物が付随している。それぞれ写真２と写真３のような状況が報告されており、今回の復元案でも検討材料とした。

写真２の構造物は、職人が現場で漆喰を敷設して整形しており、石を露出させて塗りこめていることがわかる。方形に掘り込みを形成し、防水目的で漆喰を施したのであろう。漆喰の構造物は、生活で使用した水を捨てるための設備であったと推察される。写真３は



第４図　調査地北部平面図(1/200)　一部加筆

漆喰溝より底がやや高く、高低差を作り出し、東西にのびる溝の南側に施されている。巴文の瓦当を見せる配置で漆喰溝に据えている。この構造物も、写真２のように使用した水を流す設備であったと推察される。報告では漆喰溝の規格については、北西部が幅30cm、内側幅18cmであり、周囲には漆喰で固めた面が広がり、建物の内部であることが指摘されており、礎石が残存していた北東部は漆喰溝に塗り固められていたようである(京都府埋文センター 1989)。そのほかには地下式の貯蔵庫らしきＳＫ58とＳＫ67、井戸のＳＥ84が同時期の建物に関連する遺構として報告されている。これらの遺構も、建物構造を考えるうえで町屋のどこに位置するかが重要な手掛かりとなる。

第４図は調査地北部の平面図である。図の中央を南北に側溝であるＳＤ13、その東にはＳＫ70による削平を受けた路面のＳＦ11がみえるが、さらにその東側にあるＳＤ24は後世の開発により削平されており、第４図では一部の掘り込みの形を残すのみであるが、路面であるＳＦ11を中心に路面と側溝の両側に町家が並んでいたと思われる。

第３図で示していた漆喰溝は西側にＳＫ61とＳＥ19との間の一本、東側には写真２の撮影方向を示す①の南側に漆喰溝３と、写真３の撮影方向を示す②の南側に漆喰溝２に二本と、更に写真１と第４図の南端にわずかに漆喰溝４が残存している状況が認められる。

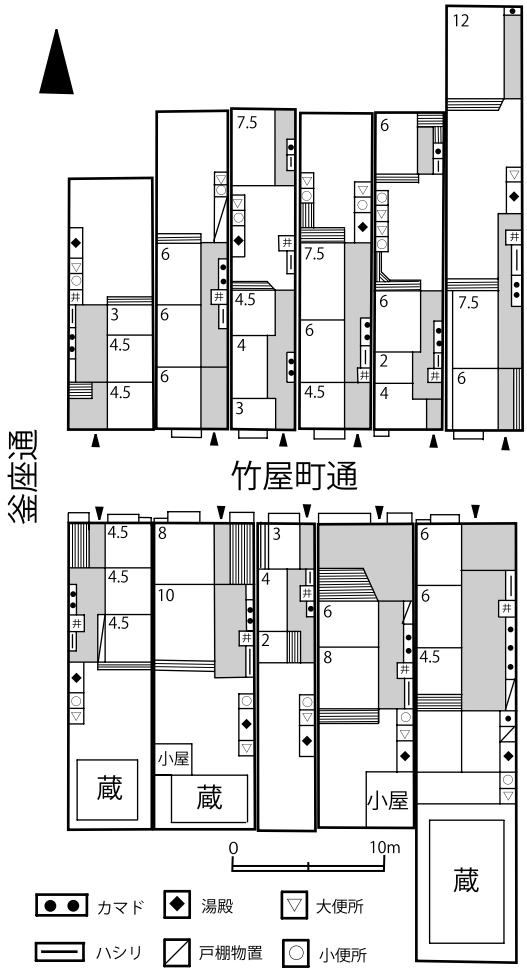
写真１は第４図の東半分を撮影したものであるが、写真中央に東西に延びる漆喰溝３を確認することができる。第４図でも確認できるが、石で溝の上部をふさぎ、漆喰で固めている。溝として機能する上で、常に開口していては都合が悪く、蓋をする必要があったのであろう。つまり暗渠構造であった可能性が高い。また、漆喰溝２と３には、それぞれ枡とおぼしき設備もそなわっていることからも、溝すべてが開口していたというよりもむしろ、漆喰溝は要所で開口し、基本的に石で塞ぎ、漆喰で接着して蓋がされていたと考えられる。

こうしたことから、これらの漆喰溝の用途は写真２か写真３のような構造物に水を流し、そのままＳＦ11に接続するＳＤ13やＳＤ24まで流すところにあったのではないか。まさに生活の用水

を処理する排水管としての役割を担っていたと思われる。

次いで問題として取り上げたいのは、写真２と写真３で取り上げた漆喰の構造物が町家のどのような設備なのかである。

第５図で町家の間取りを確認すると、入口がある片側が屋内の通りないし土間となり、隣接して縦並びに部屋が接続している。部屋の裏手には空閑地が広がるが、小屋や土蔵が設けられていたようである。



第５図　文化５(1808)年 指物屋町平面図
(土本1993、216頁をトレース)　一部改変

今回の検討対象地より南に500mばかりの地点がこの図で示されている地点だが、町家構造を考える上で、この平面プランを参考したい。まずは前述したように漆喰溝が排水溝の役割を果たしていた仮定で検討する。町家プランの中でこの機能が求められる箇所は各町家の､｢ハシリ｣であろう。｢ハシリ｣は現在の台所の流しにあたり、使用した水を流す施設であることから、写真２と写真３に写る漆喰の構造物が「ハシリ」の溝に接続する部分にあたるのではないか。しかし、第４図の平面図には漆喰溝１を切るＳＥ19のほかに井戸が漆喰溝の近くに構築されていない。第５図を参考にすれば､「ハシリ」と井戸は隣接する施設であったようであること、水をくみ上げて使用して、溝に流して廃棄する過程を考えた時に効率的であることを考えると井戸が隣接していない今回の検討対象の出土状況はある種の不自然さを伴うことから､必ずしも「ハシリ」と断定しきれず、後に示す復元案では漆喰溝の「排水口」とした。

写真３　漆喰溝と構造物
(第４図-②より)(1989)

４．町家の構造

ここまで調査の状況から町家のことに触れてきたが、京都の町家がこのような構造に至るまでの状況について概観しておきたい。丸山俊明氏によると、遡ること豊臣政権期においては、街区の直轄化がおこなわれ、東西は寺町通りから大宮通りまでを南北につらぬく突抜が通され、その両側は間口三間(約３メートル)程度で区画されたとい

う。（第６図－Ⅰ）このとき政権により簡易水道として通りと突抜の中間に南北方向に水路が敷設され、町人が水を確保するために用いられた。豊臣政権はまた、街区の内側を地子赦免としていたらしく、裏地は背割りの境まで占有され、短冊形の敷地が増加したという（第６図－Ⅱ）。背割り溝は、後年に井戸が積極的に利用されるようになると生活排水を流す背割り下水として機能することになる（第６図－Ⅲ）。このころに成立した町家は片土間・床上三室が基本構造であったという（丸山2014）。

調査でみつかった町屋構造は天明の大火で罹災したものである。豊臣政権による改良以降どのような変遷を経てきたのだろうか。

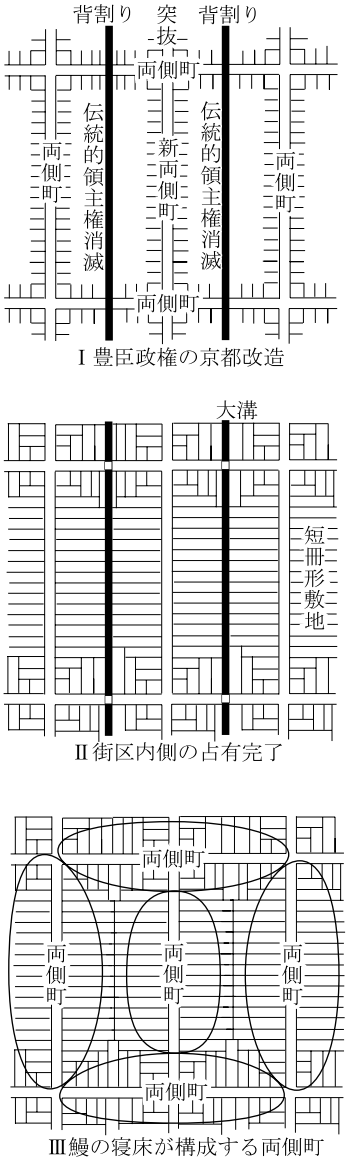
町並みに大きな変化が起こるのは宝永の大火以降のようであるが、それ以前の元禄３年の「京都御役所向大概覚書」に街路の拡幅や町並みを整えることが求められている。

京都道幅極之事

一、元禄三午年従老中被仰渡候由ニ而、京都は町小路狭ク町並悪敷候間、火事なと有之焼候道幅広ケ、町並直シ候様ニ被仰候由ニ而、度々火事跡町小路直シ候事。

一、其地火事之ためニ候間、今度焼失候町内に会所之様に明地をいたし可然候。見計存寄之通被致絵図可被相伺候事。其地は町之小路狭候而、火事有之候節防候義指つかへ候間、向後町屋作替候歟、又は火事なとにて焼候時は右之心得被致尤候事。以上。

十二月廿六日(注2)



第６図　京中街区の変遷
（丸山2014、136-137頁をトレース）
一部改変

元禄３年に京都の街路における問題点がすでに指摘されていた。道幅が狭く防火に向いていない、建て替えるなどの対策や心つもりが大切で、火事に備えるようにと命じられていた。もっとも、宝永５年に燃えてしまったわけだが、これに乗じて元禄３年の令をふまえた町作りが行われたようである。

一、宝永五子年三月八日焼失跡、此度町方道幅広ク可申付候旨、松平紀伊守殿え安藤駿河守・中曽根摂津守相窺、上は今出川、下ハ錦小路、東は寺町、西は油小路迄之分道幅馬踏三間、外ニ両方壱尺五寸溝付ヶ相極…(注3)

上は今出川、下は錦小路、東は寺町、西は油小路を範囲に、道幅が三間（約5.9m）に設定され、

両側に一尺五寸（約45cm）の溝が設置されることになった。今回の調査地は西洞院通である。油小路通より東に二本にあたり、まさにこの作事範囲に入っていた。影響を受けていると考えていいだろう。そして、道幅と溝が整えられる方針のもと、具体的にどのような町触が出されていたのかを確認しておきたい。

類焼之町々新溝を堀、古溝を埋、道幅御定杭之通早々直させ候様ニ被仰付、先達而口上書廻候処、于今其通ニ致置候所々茂有之、不届ニ被思召候、御見分御出シ被成、若其侭ニ指置候所々有之候ハヽ、急度越度可被仰付旨御意ニ候間、御定杭之通早々直之可被申候、以上　子八月廿二日[注4]

道路幅を定める杭が罹災後に打たれ、その通りに道路を復興することが強制力をもってに定められていたことがわかる。町家の規格はこうした道の幅からある程度定まったようである。

此度焼屋敷雨落之義、溝之内江落候様ニ最前被仰付候処、于今雨落溝ゟ外へ落候所有之候間、弥溝内江落し可申旨被仰付候、已上　子六月八月[注5]

軒先の雨水が道路側溝に入らず路面に落ちていたので、溝に落ちるように命令された。路面の幅と溝の幅が規定されたように路面から町屋の入り口までの距離も溝と軒の幅の関係から想定できることを示唆している。

次の文書は三条絹棚町の請願書である。請願には道幅を三間六尺（7.1m）にし、杭が打たれ、これを機に町並みを「能く」、整えることを命ぜられたことが確認できる。

一当町道幅御改之上、場踏有来通三間六尺ニ可仕之旨、則御定杭御打渡被成、追而屋作仕候時分町並能可仕之旨奉畏候

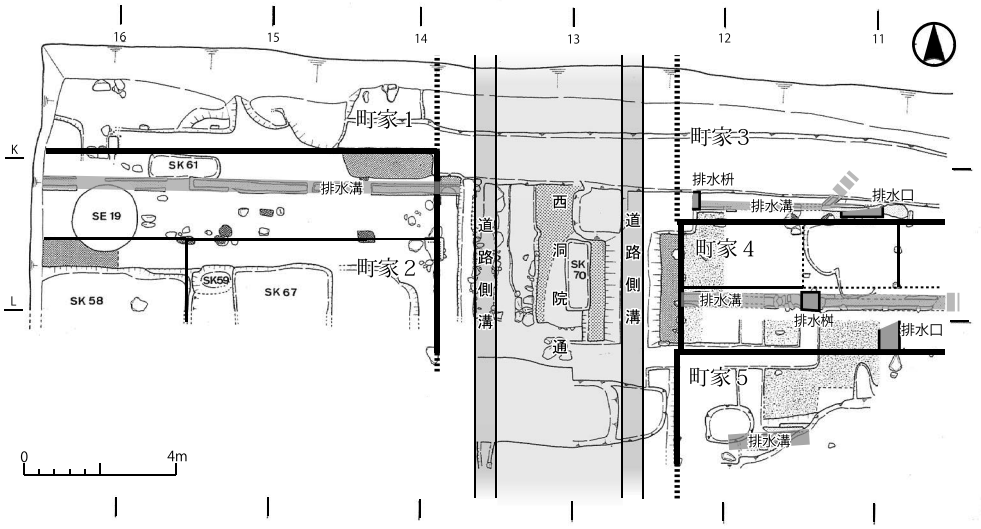
一町並両側溝幅之儀、壱尺五寸ニ可致候、是ゟ広キハ有来通可仕候、店出シ候共勿論雨落ハ溝之内限ニ可仕之旨奉畏候（中略）宝永五年子四月[注6]

京都御役所向大概覚書とは道幅が異なるが、側溝の幅に関しては一尺五寸（約45cm）と同じであり、ある程度の規格をもって町並みを整えられていたようである。店出しも雨落ち溝としての側溝のうちに納まるように指示が入っていることをふまえると、火事対策としての町作りが町の規格化を推し進めたとみることができる。そしてこうして形作られた町並みが今回の調査地点でも広がっていたと仮定できる。

天明の大火に罹災した当地は、道路幅を三間に整え、一尺五寸の道路側溝を備えており、そして道路側溝を雨落ち溝として利用する軒を有する町家が立ち並んでいた。町家内部の状況に関して検討すべき課題は多いが、町家と溝、道路の関係はある程度みえてきたのではないだろうか。なお、町家変遷に関しては丸山俊明氏の研究（丸山2007）を参考として原典にあたった。

５．復 元 案

第７図では第４図を基に復元した町屋の状況を示している。まず復元案の中央には西洞院通を渡した。こちらは側溝より内側はおよそ一間半（約３m）程度であるが、西洞院通で向き合う町家間の距離はおよそ三間（約６m）になる。溝幅も石組内はおよそ一尺五寸（約45cm）であり、元禄



第７図　町家復元案(1/200)

３年の京都御役所向大概覚書の記述と合う。復元した町家は西側北から町家１、町家２。東側北から町家３、町家４、町家５とした。町家２と町家４、町家５には道に沿って石が配されており、並ぶ石列が道と町家の境界であると推定した。

町家間の境については、まず漆喰溝を基準にした。写真２と写真３の漆喰の開口部はそれぞれがハシリなどの排水施設ならば、第５図の指物屋町の「ハシリ」事例のようにそれぞれが町家の境に張り付くように設置されていたと考えられる。このことから北向きの開口部の南限を町家の境とした。町家３と町家４においてはさらに等間隔に並ぶ石列が配されていることからもここに側通の柱が建てられていたと想定できる。町家１と町家２に関しても基本は同じで、漆喰溝と石列の関係から境界を想定した。また、こちらは町家２の漆喰溝から北側が東西に長く連続していくつかの遺構が掘削されている。これらは遺構が地境に制限されて形成された結果であると考え、状況から当該範囲に町家の境があると仮定した。

漆喰溝は暗渠構造がみられることからも土間に埋設される排水溝であり、そこから分節する開口部がハシリと想定される。町家２は北側が暗渠を伴う土間であるがハシリなどは調査区外に設けられていた可能性がある。南側に床上の座敷が配置され、ＳＫ58とＳＫ67の関係から両遺構の境に部屋の境があったと考えた。町家３は北側に座敷、南側に暗渠を伴う土間が位置する。暗渠は町家の出入り口に排水桝が設けられておりゴミを沈殿させる役割を担っていたと思われる。町家４は北側に座敷、南側にハシリと想定される開口部と排水桝を有する暗渠を伴う土間が位置する。町家５は検討範囲に暗渠を伴う土間が位置していたとして復元した。

６．ま と め

以上、限られた状況から大胆な復元を試みた。通りと側溝は宝永５年の火災後に区画が整備され、少なくとも天明の大火で罹災するまでは維持されたようである。漆喰溝に関しては、その用途と町家における位置づけの一端を明らかにできたのではないかと思うが、ハシリに付随する井

戸の状況が不明な点や、町家プランの復元が他の地点でも検証ができるのかなど、残された課題は多く、今後の調査成果によっては今回の復元案が間違いであったことが明らかになることも想定される。今度の動向に期待したい。

（かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査第３係調査員）

注１　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1989「平安京（左京近衛・西洞院辻）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第33冊

注２　京都市編　1981『史料　京都の歴史』第４巻　市街・生業、平凡社、470頁

注３　京都市編　1981『史料　京都の歴史』第４巻　市街・生業、平凡社、471頁

注４　京都町触研究会　1989『京都町触集成』別巻二、岩波書店、350-351頁

注５　京都町触研究会　1989『京都町触集成』別巻二、岩波書店、348頁

注６　京都町触研究会　1983『京都町触集成』第一巻、岩波書店、155頁

参考文献

土本俊和1993「7・4　京の町」高橋康夫他 編『図集日本都市史』東京大学出版会

丸山俊明2014『京都の町家と聚楽第―太閤様、御成の筋につき』昭和堂

丸山俊明2007『京都の町家と町なみ―何方を見申様に作る事、堅仕間敷事』昭和堂

令和元年度発掘調査略報

２．保安塚・長井野塚・奥城土遺跡

所 在 地　綴喜郡宇治田原町郷之口宇治山（保安塚）、同郷之口長井野（長井野塚）、同禅定寺奥城土（奥城土）

調査期間　平成31年４月16日～令和元年５月28日（保安塚）
令和元年７月１日～８月６日（長井野塚）
令和元年５月22日～７月23日（奥城土）

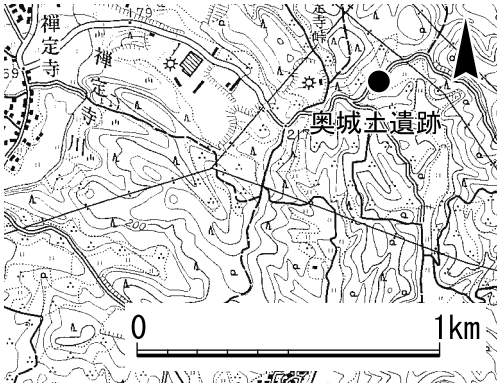
調査面積　200㎡（保安塚）、300㎡（長井野塚）、280㎡（奥城土遺跡）

はじめに　新名神高速道路建設に先立つ発掘調査である。宇治田原町内の新名神路線は、郷之口から町役場の北側のトンネル区間を経て、禅定寺を滋賀県側に抜ける経路が予定されている。これまでも本事業に先立っては禅定寺において禅定寺城跡、岨田遺跡、砂川古墳の調査を実施してきた。令和元年度は、郷之口で保安塚と長井野塚、禅定寺で奥城土遺跡の調査を行った。

なお、本事業による宇治田原町内での発掘調査は、これをもって終了する予定である。

保安塚　宇治田原盆地のすぐ西にある山地に位置しており、調査着手前は植林地として林業で利用されていた。その中でわずかに隆起する地形があることから、遺跡地図では時期不明の塚として登録されている。調査区は、その塚を対象とした１区と、近傍の山地頂部を対象とした２区を設定した。

調査の結果、１区では地形が平坦部から谷部へと変わる傾斜変換点に人為的に土を盛って塚が造られていることが判明した。塚の平面形は歪な円形で、南北2.64m、東西2.72mの規模である。塚の高さは、塚頂部と東側の平坦部比高は0.48mとなっている。反対側である塚の西側は谷になっていることから１m以上の比高があり、見る位置によって高さの印象が大きく変わる。遺物は



調査地位置図（左　国土地理院　1/25,000　宇治、右　国土地理院1/25,000　朝宮）

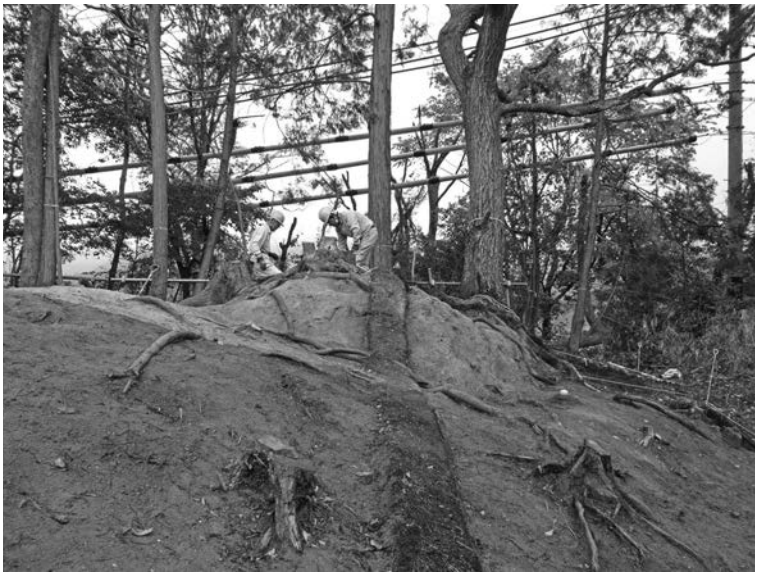


写真　保安塚調査状況（北西から）

塚の盛り土上を中心に土師器皿が20点前後出土している。完形品が多く塚上に置かれたものと考えられる。時期は16世紀を中心とするものである。２区では遺構･遺物はみつからなかった。

長井野塚　保安塚から北東へ約300mの位置にある丘陵の頂部が、時期不明の塚として登録されている。保安塚と同じく、調査着手前は林業で利用されていた所である。調査区は塚とされる場所に加え、周辺の平坦地や山地頂部に合計４か所設けた。調査の結果、表土下すぐで地山を検出したのみで遺構はみつからなかった。遺物は近世・近代と考えられる陶磁器の細片がごく少量出土したのみである。

奥城土遺跡　奥城土遺跡は散布地として登録されている。調査地は遺跡範囲の北端部にあたる山地内に位置している。調査区は緩斜面地を対象に３か所を設けた。調査区周辺では茶の生産が行われているが、調査においても茶畑の造成によって２m程度の深さまで大きく土が動かされているようすが確認できた。遺構・遺物はみつからなかった。

まとめ　調査の結果、保安塚では16世紀を中心とする年代が考えられる人工的な塚の存在が判明した。塚上では完形の土師器皿が多く見つかったことから、何らかの儀礼が行われていたと考えられる。その一方で土師器皿以外の遺物は少なく､日常的に人の生活があったとは考えにくい。塚の性格を考える手がかりとして、まず現在における周辺の道路状況をみると、宇治市の市街地から白川を経て宇治田原方面へと続く道路が保安塚の東200mで二手に分岐している。

一つは東側にのびて保安塚のすぐ南を切通しのかたちで通過して東約800mで「郷之口下町」交差点へと至る。ここは旧市街地の西の入り口にあたる場所である。もう一つの道路は、保安塚の南東約400mの銘城台付近で国道307号と接続している。国道307号は田原道をほぼ踏襲していると考えられる道路である。明治時代の地図でそれぞれの道路を確認すると、前者の道路及び田原道は確認できる。しかし、国道307号と接続する後者の道路は見当たらない。同じく宇治方面に抜ける道路である宇治道は、近世半ばに開かれ19世紀に改修したとされる宇治川沿いの道である。

したがって、保安塚のすぐ南の道路は、少なくとも宇治道改修以前は、宇治田原を宇治方面と結ぶ山越えの道として重要視されていたはずである。すなわち、保安塚で行われていたと想定される儀礼は、田原盆地の西の入り口に位置していることから生じる境界の意識や、道の通行に関わるものであった可能性が高いと考えられる。

（加藤雅士）

３．芝山遺跡・芝山古墳群第19次（Ｏ・Ｐ地区）

所 在 地　城陽市富野中ノ芝ほか

調査期間　平成31年４月22日～令和元年９月27日

調査面積　1,687㎡（Ｏ地区）、1,328㎡（Ｐ地区）

はじめに　芝山遺跡・芝山古墳群は、城陽市東部に広がる丘陵上に位置し、東西約950m、南北約840mに広がる。これまでの発掘調査で古墳時代前期から後期の古墳や奈良時代の掘立柱建物群、道路状遺構などを検出している。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

調査概要　今回の調査は、府道256号の西側に調査区を２か所設定し南側をＯ地区、北側をＰ地区とし、発掘調査を実施した。

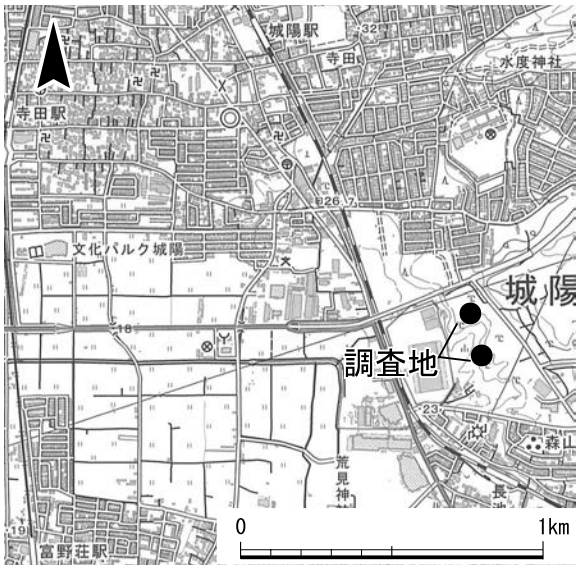
Ｏ地区の調査では、古墳時代の円墳３基と飛鳥時代の竪穴建物４基、奈良時代の掘立柱建物１棟を検出した。

古墳１は推定19mの円墳である。周溝南側は後世の削平を受け消失している。周溝のほぼ中央部の埋葬施設は木棺直葬で、棺内に赤色顔料が塗られたと考えられる。棺内の北西・中央部から鉄鏃、南部では須恵器の杯・壺がまとまって出土した。５世紀後半のものと考えられる。古墳２は径20.3mの円墳である。周溝は調査区北西側で北に向かって屈曲することから造り出しを持つ可能性がある。墳丘中央部の埋葬施設は木棺直葬であり、棺の底板に赤色顔料が塗られたと考えられ、棺内からは須恵器、土師器、鉄刀、土玉が、棺外では須恵器、土師器、鉄鏃、鉄槍などが出土した。６世紀前半のものと考えられる。

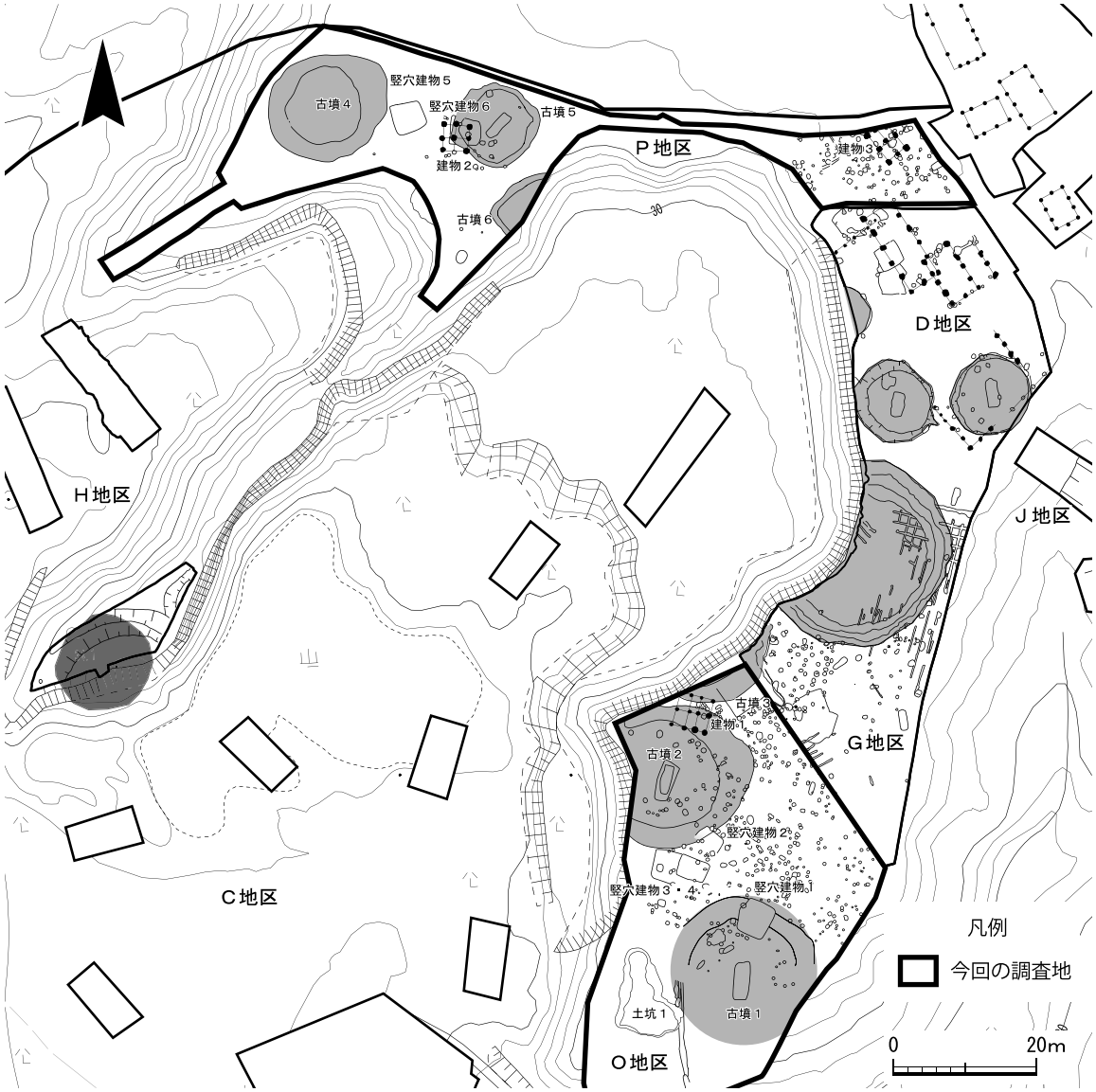
Ｐ地区の調査では、古墳築造以前の竪穴建物２基、円墳１基、方墳２基、飛鳥時代の竪穴建物１基、奈良時代の掘立柱建物１棟を検出した。

古墳４は径17.7mの円墳である。周溝に伴う埋葬施設はなく高塚であったと考えられる。周溝西側では、５世紀後半の須恵器、土師器がまとまって出土した。

古墳５は竪穴建物６が建てられた後に造られた一辺11.2mの方墳で、墳丘の中央部の埋葬施設は木棺直葬で、底部に赤色顔料が塗られたと考えられ、５世紀後半の須恵器片が出



第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　宇治）



第２図　遺構配置図（１/1,000）

土した。古墳の周溝が埋没した後に掘立柱建物１が建てられる。調査区西側では、梁行２間、桁行２間以上の掘立柱建物１棟を復元した。平成28年度に検出した建物群と主軸の振角がほぼ同じであり、一連のものと考えられる。

まとめ　今回の調査で、古墳時代の竪穴建物１基、方墳２基、円墳４基、飛鳥時代の竪穴建物５基、奈良時代の掘立柱建物３棟を検出した。これまでの調査で見つかった古墳を合わせると32基の古墳を確認した。芝山古墳群では、古墳時代前期に梅の子塚古墳１・２号墳付近に小型方墳が築造され、中期になると梅の子塚古墳より20m低い丘陵平坦部へ小型方墳や中型円墳が築造され、後期には小型の円墳が築造されるようになる。今回の調査の結果、Ｐ地区で中型円墳と方墳間に明確な時期差や立地差がみられないないこと、飛鳥時代の竪穴建物築造段階で古墳の周溝は埋没しており墓域から居住域への変化が短期間で行われたことが判明した。今回の調査で木津川右岸下流域の古墳時代の墓制や芝山遺跡の集落の様相を明らかにするうえで貴重な資料を得た。

（菅　博絵）

４．犬飼遺跡第２・３次

所 在 地　亀岡市曽我部町犬飼

調査期間　平成30年11月12日～令和元年10月３日

調査面積　5,569㎡

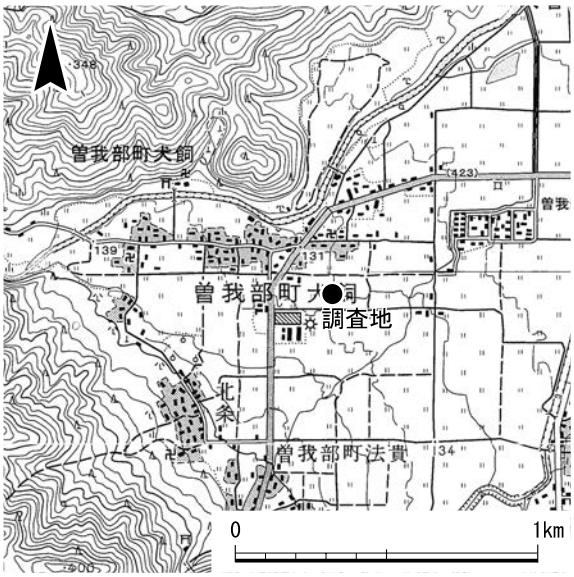
はじめに　犬飼遺跡は、亀岡市の南東部の扇状地上に位置する、古代から中世の集落跡である。遺跡に隣接するように近世の摂丹街道が通っており、周辺には50基以上の古墳が密集する法貴古墳群や、亀岡市内でも屈指の規模を持つ法貴山城等の遺跡が位置している。なお、令和元年６月16日には中世面を対象に現地説明会を行い、府内外から200名以上の参加を得た。

調査概要　今回の調査では、古墳時代から中世までの幅広い範囲の遺構・遺物を確認した。以下、時代別に調査成果の概要を記す。

（１）中世の調査　中世の遺構としては、13世紀後半に営まれた方形居館とその関連遺構を検出した。居館は３本の堀で３方向を囲まれた、いわゆる方形居館であり、北側は自然の段丘崖を利用して敷地の境界とする。居館の内部も堀によって、区画①と区画②に区分されており、それぞれ区画①が約500㎡、区画②が約350㎡の広さを測る（写真）。双方の区画とも、母屋とみられる建物と、それに付属する小型の建物１棟を検出した。区画②で検出した大型建物は西側の建物と比較して平面規模が大きく、柱痕の多くに根石が据えられ、内部に竪穴状に掘りくぼめた「土間」とみられる空間を持つなど構造上の差異が認められた。したがって、区画①と②ではその用途・性格を異にしていると考えられる。

居館を囲む堀は、「Ｌ」字状のものが２本、直線のものが１本あり、最大幅約８ｍ、最大深度約２ｍを測る。「Ｌ」字状の堀の南西端ではそれぞれ土橋を検出したが、石組みや暗渠などを伴わず、地山を削り残して構築されたものである。また、堀の付属施設として、堀に水を引き入れるための水路や、それに伴う杭列などを検出している。

堀の機能時の層位から漆器椀や草鞋などの有機質遺物が良好な状態で出土した。また、中国製緑釉盤をはじめ、一定量の輸入陶磁器も出土しており、地域の有力者が居住していたと考えられる。



調査地位置図（1/25,000）

写真　亀岡市犬飼遺跡全景（上が北）

（２）古代の調査　古代の遺構として、掘立柱建物５棟と、流路ＮＲ50を検出した。掘立柱建物は梁行２間・桁行２間のものが４棟、梁行２間・桁行３間で東側に廂をもつものが１棟あり、うち４棟は北から西に１～10°角度を振る。出土遺物が少なく時期が不確定であるが、奈良～平安前期に帰属する建物群であろう。

流路ＮＲ50は調査区の西側で検出したもので、最大幅15mを測る。埋土中には古墳時代から古代までの遺物を含んでおり、上層からは「家」と書かれた墨書土器を含む奈良時代の遺物が多量に出土した。中層からは飛鳥時代前半の土器・木器のほか、板材をはじめとする建築部材が流路に直交するように並べられた状態で出土した。

（３）古墳時代の調査　古墳時代の遺構として、竪穴建物４基と流路ＮＲ50（下層）がある。竪穴建物はいずれも後世の遺構による削平が大きく、正確な規模等は不明であるが、１辺６ｍ前後の方形プランを持つと考えられる。埋土中から布留形甕が出土しており、竪穴住居群も古墳時代前期後半～中期前半のものであろう。また、先述の流路ＮＲ50の下層から古墳時代前期～中期の遺物がまとまって出土した。同じ層位から杭列や桃核を検出しており、水辺の祭祀にかかわる遺構である可能性がある。

まとめ　これまで、亀岡盆地では中世の方形居館は春日部遺跡などでの検出例があるが、いずれも部分的な調査であり、今回のように堀と区画の内部を含め全体を調査した事例は全国的にも稀有な事例である。今回の犬飼遺跡の調査成果は、今後、中世の社会を考える上で定点的な資料となりうるだろう。また、古墳時代から古代に属する遺構も多く検出した。犬飼遺跡に近接するように、近世の摂丹街道が通っているが、古くからこの地が地勢的に重要な地域であったことが窺がえる。

（桐井理揮）

５．上野遺跡第３次

所 在 地　京丹後市丹後町上野地内

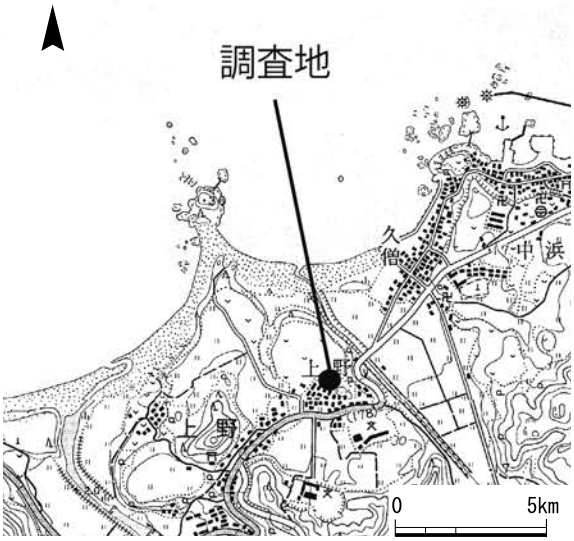
調査期間　令和元年８月27日～12月16日

調査面積　1,100㎡

はじめに　上野遺跡は日本海に面する標高約27ｍの海岸段丘上に位置し、縄文時代から平安時代にかけての遺物の散布地として知られている。昨年度は、これら遺物のほか、後期旧石器時代の所産と判断しうる石器の出土を確認している。今回の発掘調査は、浜丹後線（上野平バイパス）民安関連道路新設改良工事に先立ち、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

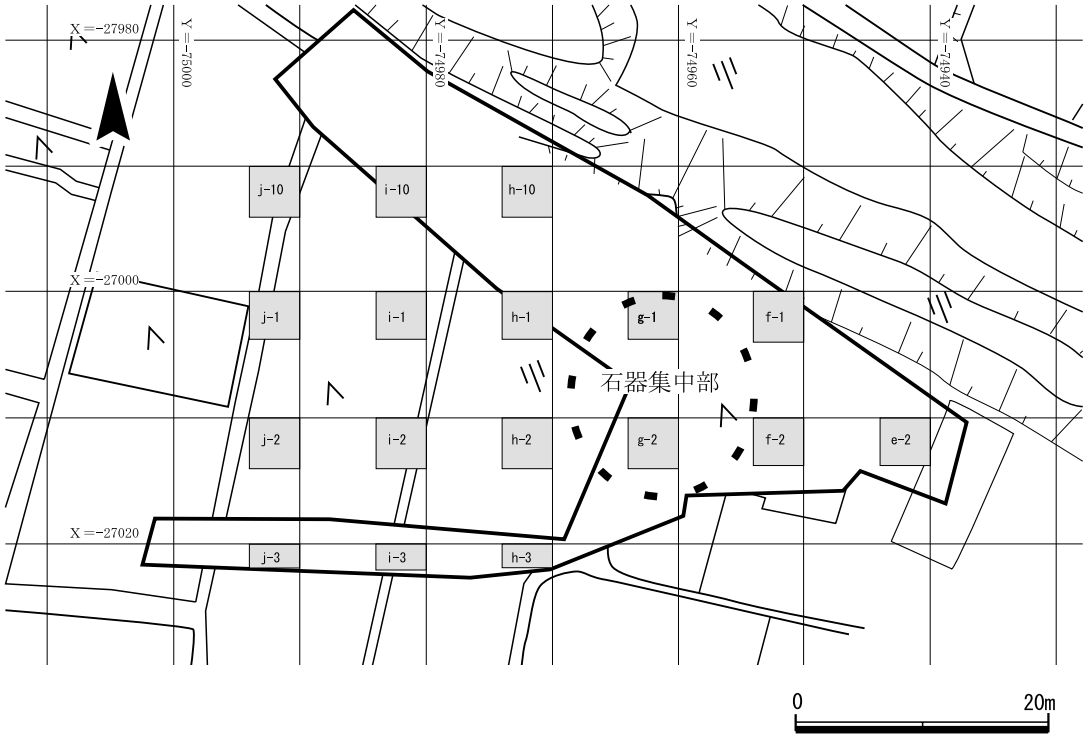
調査概要　調査地は海成段丘上に位置し、段丘に直接繋がる山地はみられない。このことから、本遺跡における堆積物は、近現代の耕作土と基盤となる段丘礫層を除き、すべて風成であると判断できる。表土を除去した直下の風成堆積層中に、近傍の河川には存在しないチャートや玉髄の亜角～円を呈する細～中礫のほか、鋭い縁辺をもつ破砕礫を多数確認した。これらの礫は、後期旧石器時代に属するとみなしうる石器が出土した地点の付近に特に多く出土した。これを受け、後期旧石器時代の遺物包含層の確認を目的とし、大グリッド（10m×10m）の北西隅の17か所に４ｍ×４ｍを基本とする中グリッドを設定し調査を実施した（第２図）。

調査地東半部のAT（姶良丹沢火山灰：約３万年前）包含層とDKP（大山倉吉軽石：約６万年前）包含層に挟まれた古土壌層からチャートを主とする剥片や石核などの後期旧石器時代の石器が多く出土することを確認した。遺物の水平及び垂直の分布状況を確認するため、遺物が集中する地点を中心に、適宜２ｍ×２ｍの小グリッドを設け、掘削及び遺物の取り上げを進めた。これらの遺物はごく小規模な石器集中ブロックを形成し、小型の台形（様）石器、鋸歯縁石器、抉入石器、嘴状石器を主な器種とする後期旧石器時代前半期の要素が強い石器群であることを確認した。



第１図　調査地位置図（1/25,000）

まとめ　今回の発掘調査では、調査地東部において、約３万年前に噴出したATと約６万年前に降灰したDKPに挟まれた古土壌層から後期旧石器時代前半期に属するとみなしうる石器群を確認した。これまでの近畿圏内における旧石器時代遺跡の発見事例は河岸段丘などの内陸に多く、海成段丘に立地する



第２図　調査地グリッド配置図(1/600)

事例は報告がない。

また、本遺跡における石器群は遺跡の近傍にはないチャートや玉髄を利用していることから、石材利用の形態についても近隣の河川等で採取可能ないわゆる在地石材を多用する当該期のそれとは異なる。ただし、石器群の様相は他の同時期の石器群と通底する。本遺跡におけるＡＴ下位石器群の解釈については、遺跡の立地及び石材利用のありかたを検証することにより、海浜部における旧石器時代の人類活動について考証するための貴重な事例となるだろう。

（面　将道）

6．丹波丸山古墳群第４次

所 在 地　京丹後市峰山町丹波

調査期間　令和元年９月１日～10月11日

調査面積　110㎡

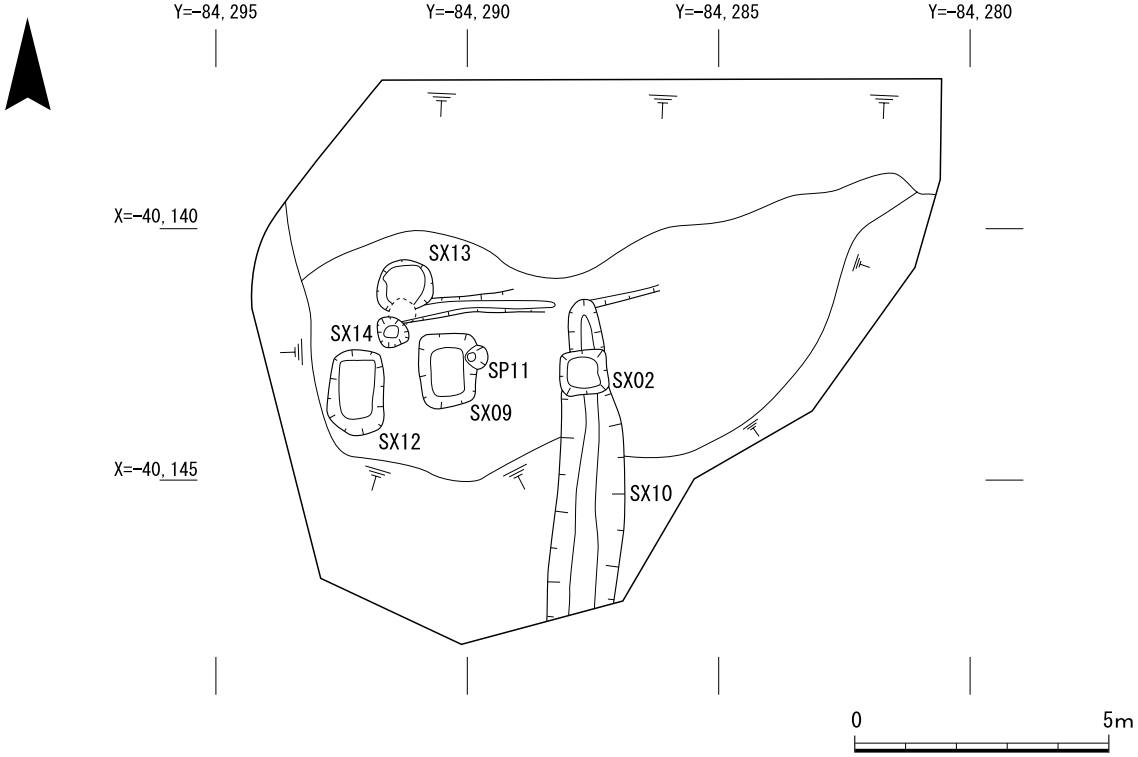
はじめに　丹波丸山古墳群は、峰山盆地の北端部にあって、丹後半島を北流する竹野川左岸の丘陵上に所在する。峰山盆地北部の丘陵地帯は、ガラス管玉などの多彩な副葬品が出土した大型の弥生墳墓である赤坂今井墳墓、「青龍三年」銘をもつ方格規矩四神鏡や画文帯環状乳神獣鏡が出土した太田南古墳群、日本海三大古墳のひとつである神明山古墳など弥生時代末から古墳時代にかけての有力墓が集中する地域のひとつである。古代には多久神社や矢田神社など式内社も多く存在しており現在まで信仰の対象となっている。今回の調査は一般府道掛津～峰山線広域連携交付金(改築)事業の実施に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。これまで３次にわたる面的調査・小規模調査を行っており、今回は昨年度調査を行ったⅡ区の未調査部分を中心に面的調査を行った。

調査概要　Ⅱ区は、東に張り出す尾根筋上と南側山腹の小規模テラスに分かれる。本年度は南側山腹の傾斜面から小規模テラスにかけての範囲の調査を行った。小規模テラスは長さ約10m、幅約７ｍの規模で、半円形に山腹を切り出すことで成形している。これまで中世墓３基、土坑１基、経塚１基、ピット２基、溝２条を検出した。本年度は既往の調査で確認された経塚１基とその北側のピット１基、小規模テラスの西半を中心に調査した。

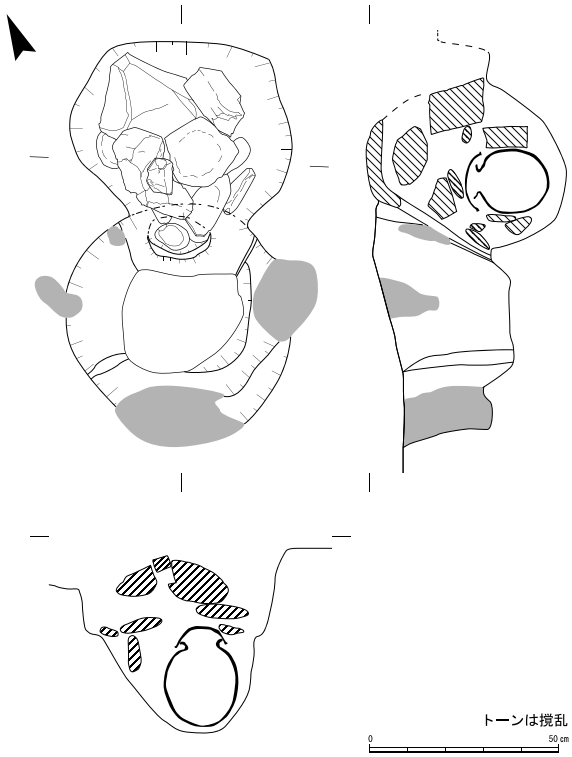
経塚ＳＸ14　直径0.9m、深さ0.4mの円形土坑の北西側壁面に袋状の横穴を設け、横穴内に外容器をおさめ、その周辺に石室を設けて構築される。横穴は幅0.6m、奥行き0.45m、高さ0.5mで、奥壁側に最大幅約0.12mの弧状のテラス部分をもつ。石室は外容器周辺に拳大の円礫や人頭大の角礫を概ね４段積み上げたものである。外容器は須恵器甕を身として、須恵器片口鉢で蓋をしたもので内部に経筒や経巻は確認できなかった。

第１図　調査地位置図(1/25,000)

土坑ＳＸ13　直径1.2m、深さ0.4mの円形の土坑である。ＳＸ14が構築された際に南西側が一部削平されていることから、ＳＸ14に先行する遺構である。内部から遺物は出土し



第２図　遺構配置図(1/150)



第３図　経塚ＳＸ14平面図(1/20)

なかった。

小規模テラスは昨年度調査された溝ＳＸ10を中心に東西にわけられている。西半では遺構は確認できず広場状の空間が広がっていたようである。

まとめ　今回の４次調査では小規模テラスに構築された経塚の調査を完了した。また、小規模テラスの空間利用を明らかにした。経塚の外容器内部には経筒や経巻は確認できておらず、有機質の経筒と経巻であった可能性がある。昨年度の調査で明らかとなった中世墓と今年度調査を完了した経塚は小規模テラスを東西に二分する溝ＳＸ10の西側に集中してつくられており、中世における聖域・墓域的空間形成の一端を明らかにした。さらに溝の東側には広場状の空間が広がっていたことを確認しており、聖域・墓域的空間に隣接する広場空間をつくりだして利用していた可能性が指摘できる。　（名村威彦）

7．稚児野遺跡第２次

所 在 地　福知山市夜久野町井田

調査期間　令和元年９月２日～10月31日

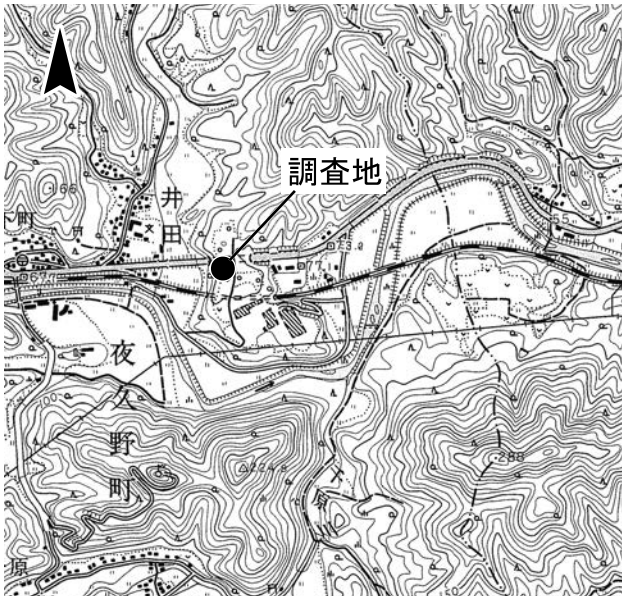
調査面積　700㎡

はじめに　今回の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局の一般国道９号夜久野改良事業に伴い実施した。稚児野遺跡は、牧川と畑川の合流点を見下ろす標高100～105ｍの台地上に広がる。昭和56年度の養豚場建設に伴う発掘調査では、中世の陶磁器を出土した柱穴の検出や、縄文土器や打製石斧が調査地内から採集された。縄文時代から中世にいたる遺跡として知られていた。

調査概要　調査は遺構・遺物の有無を確認するため、調査範囲内に長短10か所のトレンチを設定し、重機による表土掘削から始めた。地表面の黒ボク土を除去すると、やや赤味を帯びたにぶい褐色のローム層が露出した。さらに徐々に掘り下げていくと、明黄褐色のローム層に変化し、この層中より後期旧石器時代のサヌカイト剥片及び石核が出土した。出土レベルは現地表下約40～45㎝、標高103.4～103.7ｍを測る。すべてのトレンチで明黄褐色土の面を慎重に削り石器類や礫片を原位置で残しつつ精査を進めた。その結果、10トレンチのうち７つのトレンチからサヌカイト、チャート、黒曜石、シルト岩などを石材とする石器類が出土した。これらの分布状況は、調査範囲を広く覆い、無遺物空間をはさんで大きく２か所に分かれる状況が明らかとなった。

石器類にはサヌカイト製の基部加工ナイフ形石器･掻器･削器、片面加工石斧(石材不明)、敲石、さらにサヌカイト及びチャート製の石核・剥片・砕片、黒曜石製剥片１点などがある。時期は、ナイフ形石器と石斧の形態から後期旧石器時代前半の約３万年前と考えられる。

まとめ　丹波・丹後地方における旧石器時代資料は、これまで単独出土のものが知られていただけで、石器類の分布状況が面的に捉えられた例は、先に調査の進んでいる丹後町上野遺跡に次いで２例目となる。今回の石器類の詳細な内容や遺跡の性格については今後の調査を待たなければならないが、日本海側から当地域における旧石器時代社会の動向を知る上で重要な遺跡といえる。



調査地位置図(1/25,000)

(黒坪一樹)

8．稲泉遺跡第１次

所 在 地　福知山市夜久野町井田

調査期間　令和元年11月６日～12月18日

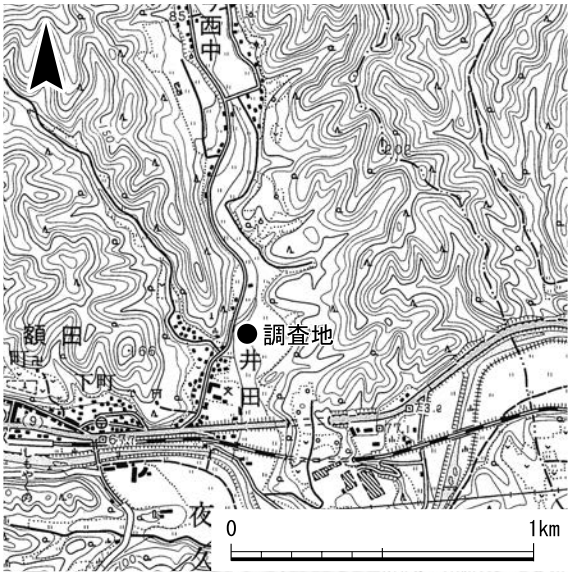
調査面積　434㎡

はじめに　稲泉遺跡は、牧川と支流の畑川の合流地点付近に位置する、縄文～中世の遺物散布地である。これまで稲泉遺跡では、ほ場整備の際に大量の遺物が採取されたことで知られていたが、発掘調査が行われるのは今回が初めてである。今回の発掘調査は、遺跡地内で府道建設工事が行われることに伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査では、工事の掘削が及ぶ南北300mの範囲に調査区を８か所設定し、遺構密度と、掘削深度の把握に努めた。

下流側に設定した３か所の調査区では、ほ場整備の際の造成土が0.5～1.0m堆積しており、その土層を除去したところから河川堆積と考えられる砂礫層を検出した。これらの調査区から顕著な遺構・遺物は認められなかった。中央に設定した２か所の調査区でも同様に造成土が0.5m以上堆積していたが、その下層の砂礫層の上面で遺物包含層を検出した。しかし、遺構を検出するには至らなかった。なお、この５か所の調査区は、ほ場整備前の地形図を瞥見すると畑川の攻撃斜面に当たっており、流路が固定される以前は河床であった可能性が高い。

上流側に設定した３か所の調査区では造成土は相対的に薄く、部分ではあるが、安定地盤及び遺物包含層を検出した。出土遺物は古代の土器を中心に、弥生時代後期～中世までの時間幅が認められる。しかし、ほ場整備及びほ場整備前の棚田による地形改変によって包含層の大部分は削平を被っており、残存状況には恵まれない。



調査地位置図(1/25,000)

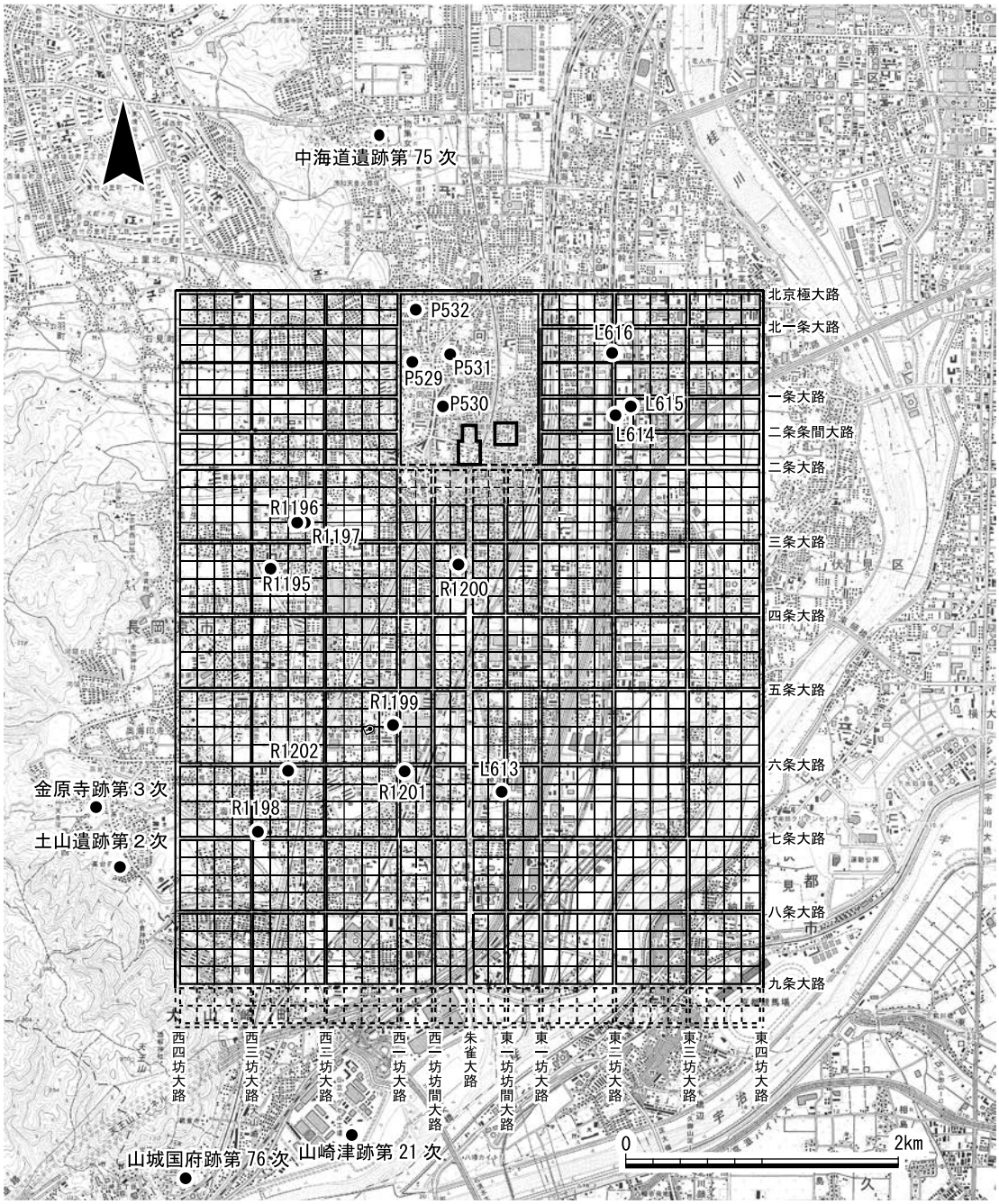
まとめ　今回の調査では、上流側の調査区を中心に遺物が散布する状況が明確になった。したがって、本来の稲泉遺跡は、より丘陵に近い地点に遺跡の中心があったものと考えられる。これまで採集されている土器の中には完形に近いものも含まれていることから、大規模な地形の改変を被っているとはいえ、近隣に遺構が存在している可能性が高いといえる。

（桐井理揮）

長岡京調査だより・133

長岡京の発掘調査は、広域にまたがることから、向日市、長岡京市、大山崎町、京都市、当調査研究センターの各発掘調査機関が集まり、長岡宮・京の発掘調査情報などの共有化のため、月一度、当調査研究センターにおいて長岡京連絡協議会を行っている。

今年度は８月から、下半期の１月まで報告のあった、宮内４件、左京域４件、右京域８件、その他５件の発掘調査のうち、主なものについて報告する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はＰが旧域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　宮域の調査は、上半期では１件のみであったが、下半期は調査件数が伸びて４件の実施となった。宮内第529次調査地は、一条条間小路の推定地であったが、検出されなかった。すでに削平された可能性がある。また、柵列が１条検出され、10尺等間の柱穴であった。そのうちの一つから長岡京期の土師器椀が出土している。

宮内第530次調査地は、西国街道に面した場所であったが、江戸時代の整地遺構や近代以降の土坑などが検出されたものの、長岡京期の遺構はみつからなかった。

宮内第531次調査地は、長岡宮の大蔵推定地であったが、後世によって大きく削平を受けており、長岡京期の遺構は検出されなかった。

宮内第532次調査地は、北辺官衙域に推定されるところで、室町時代の寺戸城跡が位置するところでもある。調査の結果、平安時代から鎌倉時代頃の柱穴10基が検出された。近世以降の削平が大きいと考えられていた地域での中世以前の遺構の検出によって、この地域における今後の調査の進展が望まれる。

左京域　左京第613次調査地は、東一坊坊間大路にあたり、東西両側溝を検出した。溝の深さがあまりないため、少し削平されているとみられる。大路東側の宅地で掘立柱建物２棟、柱列１条を、西側宅地で掘立柱建物２棟、溝２条を検出している。この調査地では、「美作国勝田郡□□郷庸米五斗」と書かれた木簡が出土しており、出土地点と荷札木簡の関係を考える上で、重要な調査成果を得た。

左京第614次調査では、東二坊大路東側溝を検出した。ここから、記号を書いた墨書土器をはじめ、土師器や須恵器が出土している。

左京第615次調査地は、東二坊大路東側の宅地で、北側には東院がある場所にあたっている。左京二条三坊一町の宅地内の調査は今回がはじめてで、溝８条、掘立柱建物１棟が検出された。そのうち、掘立柱建物は９尺等間で、二条条間北小路北側溝から約42mの地点に相当することから、重要な建物と推定される。

右京域　８件の調査のうち、右京第1198次･伊賀寺遺跡の調査では、大きな成果を得つつある。西調査区では縄文時代の土坑２基を検出したほか、東調査区では古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物、柱列、土坑などが検出されており、かなり複雑な遺跡となっている。

右京第1199次調査では、西一坊大路東側溝の推定地であったが、当該期の柵５条、土坑１基などが検出されたにすぎない。ただ、南北方向の柵の内、東側の２条は掘立柱建物となる可能性があり、宅地内の配置を考える上での手がかりとなった。

その他　旧乙訓郡域では、長岡京域や域外でも調査が行われている。中海道遺跡第75次、土山遺跡第２次、金原寺跡第３次、山崎津跡第21次、山城国府跡第76次の発掘調査が実施されている。個々では、貴重な成果が出ているものの、全体としては大きな遺構・遺物が見つかるまでには至っていない。

（土橋　誠）

現地公開（令和元年度下半期）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査を実施している京都府内の遺跡について、現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地説明会

城陽市水主神社東遺跡　令和元年10月26日（土）に開催した。今回の調査では、縄文時代後期から晩期にかけての氾濫流路において木組み遺構や木道などを検出した。これらの遺構は、流路に並行して作られており、流路内の流水を利用して食材や木材を加工するためのものであったと考えられる。縄文時代晩期における木津川流域の土地利用の一端を明らかにすることができた。

当日は、198名が参加され、遥か縄文時代に造作された木組み遺構などに感心しながら見学された。

舞鶴市満願寺跡　令和元年11月２日（土）に開催した。今回の調査では、鎌倉時代に創建されたと伝わる満願寺に関わる礎石建物や石組みの溝などを検出した。これらの遺構は、鎌倉時代の創建期のものと室町時代の再建期のものに分類できる。中世寺院の変遷を知ることができる貴重な調査となった。

当日は、93名の方が参加された。

京都市平安京跡　令和２年２月15日（土）に開催した。今回の調査では、戦国時代の堀３条や柱列などを検出した。堀は戦国時代（16世紀前半）に掘られたのち、短期間で埋められており、当時、京都の各所に設けられた「構」に伴う堀と考えられる。この「構」の居住者は明らかではないが、堀の規模から武家や寺社によって掘られた可能性もある。この堀はこれまで知られていなかったものであり、戦国時代における京都の街並みを考える上で貴重な発見となった。

当日は、寒空にもかかわらず290名が参加され、巨大な堀や遺物を熱心に見学された。

（筒井崇史）

舞鶴市満願寺跡現地説明会

普及啓発事業（令和元年度下半期）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

第142回埋蔵文化財セミナー

令和元年11月９日（土）に長岡京市の長岡京市立産業文化会館において開催した。

今回のセミナーでは、「淀川水系の古墳を考える！－継体朝の地域有力者たち－」と題し、城陽市芝山古墳群の調査成果から明らかになった古墳時代後期、継体大王の時代の在地の有力者たちの実態に迫ることを目的とした。

まず、筒井係長がこのセミナーの趣旨説明を行ったのち、当調査研究センターの菅博絵調査員から、「京都府南部の墓制－城陽市芝山古墳群の調査成果を中心に－」と題して、芝山古墳群の発掘調査成果について報告し、木棺直葬を主体とする古墳が多く見られること、京都府南部では横穴式石室を主体とする古墳が少ないことなどを明らかにした。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会の堀真人副主幹からは、「古墳時代後期の墓制－近江の継体朝を中心に－」と題して、滋賀県北西部の妙見山・王塚古墳群や南畑・下平古墳群など、芝山古墳群と同じく木棺直葬を主体とした古墳の事例を報告いただいた。

高槻市立今城塚古代歴史館の今西康宏学芸員からは、「中小古墳からみた継体朝の摂津－三島地域を中心に－」と題して、本セミナーの主題である、継体大王の真の陵墓といわれる今城塚古墳やその周辺に分布する中小古墳の調査成果を中心に報告いただいた。

当日は、京都府内外から103名の方が参加され、盛況のうち終了した。

第143回埋蔵文化財セミナー

令和２年２月15日（土）に京都市南区のイオンモールKYOTOにおいて開催した。

今回のセミナーでは、「弥生時代の住宅事情！－弥生人の住まいの実像に迫る－」と題し、八幡市美濃山遺跡の調査で明らかになった弥生時代後期の屋外排水溝を持った竪穴建物（竪穴住居）に注目し、京都府や大阪府における調査事例を報告するとともに、当時の社会の変化に迫ることを目的とした。

当調査研究センターの中川和哉課長補佐からは、「弥生時代後期の屋外排水溝を備える竪穴住居－八幡市美濃山遺跡を中心に－」と題して、美濃山遺跡や大阪府北西部の屋外排水溝を持つ竪穴建物の事例を報告し、これらの住居の機能も含めて、その実態に迫った。

茨城市教育委員会の正岡大実発掘調査員からは、「河内弥生人の住まいに迫る－大阪府八尾南遺跡の竪穴住居－」と題して、八尾市八尾南遺跡で見つかった周堤や屋外排水溝を持つ竪穴建物の事例を報告いただき、竪穴住居の構造や機能についての見解を示していただいた。

同志社大学歴史資料館の若林邦彦教授からは､｢弥生～古墳時代移行期の集落と社会｣と題して、先の報告の背景として、弥生時代から古墳時代にかけての集落や社会が、環境変化や当時の権力の発生などによって移り変わっていく様子など講演いただいた。

当日は、京都府内外から126名の方が参加され、盛況のうち終了した。

2019向日市まつり

令和元年11月16日（土）･17日（日）に京都向日町競輪場で開催された「2019向日市まつり」に「軒丸瓦コースターをつくろう」という体験講座を行った。 古代寺院や古代宮殿の屋根を飾った軒丸瓦の文様をコースターサイズに縮めて笵を作り、参加者には当時と同じように笵に粘土を詰めてとりはずす体験を行っていただいた。できあがったコースターサイズの瓦当は、オーブントースターで焼き上げるか自然乾燥するかを選んでもらい、それぞれ持ち帰っていただいた。催しには小さなお子さんからご年配の方まで幅広い年代の方々が参加され、当時の瓦作りの一端を体験してもらえた。

両日とも天候に恵まれ、当初に用意した粘土がなくなるほどの盛況で、合わせて202名の参加があった。

関西考古学の日2019　秋の考古学体験講座

「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに属する12法人が、広く市民の方々に文化財や考古学の重要性などを知っていただくために、７月から11月の５か月間に考古学に関連した行事を実施する連携事業である。

今年度は、３回の講座を予定していたが、10月12日（土）の第２回「見る、魅る、分かる、京都の弥生土器」は台風のために中止となった。第１回は９月21日（土）に加藤雄太調査員が「発掘された伏見人形」と題して講義し、11名の参加を得た。第３回は11月２日（土）に荒木瀬奈調査員が「丹波の横穴式石室を探る」題して講義し、17名の参加を得た。いずれの講座も講義終了後には積極的な質問が出された 。

出前事業「勾玉をつくろう」

10月29日（火）に、向日市立第３向陽小学校において、小学校４年生の児童を対象として勾玉づくりの出前授業を行った。当日は、職員から勾玉についての説明を受け、参加者は自分好みの勾玉づくりに励んだ。２クラス43名の参加があった。

（筒井崇史）

センターの動向

（令和元年９月～令和２年２月）

９	21	関西考古学の日2019　秋の考古学講座「発掘された伏見人形」（参加者11名）
	25	長岡京連絡協議会
10	３	第１回全国埋蔵文化財連絡協議会近畿地区コンピューター等研究委員会（於：八尾市）
	９	日向理事満願寺跡（舞鶴市）現地指導
	14	「発掘された京都の歴史2019」終了（於：京都府立山城郷土資料館、9月28日～）
	23	川向遺跡現地調査開始、長岡京連絡協議会
	26	水主神社東遺跡（城陽市）現地説明会（参加者198名）
	29	出前事業「勾玉をつくろう」（向日市立第３向陽小学校、参加者43名）
	31	丹波丸山古墳群（京丹後市）現地調査終了、稚児野遺跡（福知山市）現地調査終了
11	１	岡田国遺跡遺跡検討会、上原・高橋両理事、古川匠氏（京都府文化財保護課）、大坪州一郎氏（木津川市教育委員会）出席
	２	関西考古学の日2019　秋の考古学講座「丹波の横穴式石室を探る」（参加者17名）、満願寺跡（舞鶴市）現地説明会（参加者93名）
	５	稲泉遺跡（福知山市）現地調査開始
	６	茶壷蔵跡（宇治市）現地調査開始
	９	第142回埋蔵文化財セミナー「淀川水系の古墳を考える！」（於：長岡京市、参加者103名）
	14	奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会研究会（12名参加）
	16	向日市まつり「軒丸瓦コースターをつくろう」（於：向日市、参加者202名、～17日）
	21	令和元年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会第２回役員会（於：東京都、～22日）
	22	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会（於：和歌山市）
	27	長岡京連絡協議会、上原理事満願寺跡（舞鶴市）現地指導
12	５	第33回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議（於：兵庫県）
	10	茶壷蔵跡（宇治市）現地調査終了、菖蒲谷口遺跡（舞鶴市）現地調査開始
	11	府庁ロビー展「京都・縄文最前線」（於：京都府庁、～16日）
	12	令和元年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（於：京都市、～13日）
	16	上野遺跡（京丹後市）現地調査終了
	18	長岡京連絡協議会、第32回理事会（於：京都市）、稲泉遺跡現地調査終了
１	７	長岡京跡・開田遺跡（長岡京市）現地調査開始
	20	川向遺跡（京丹後市）現地調査終了
	22	長岡京連絡協議会
２	４	井上理事長平安京跡（京都市）現地指導、満願寺跡（京丹後市）現地調査終了
	５	令和元年度第２回埋蔵文化財担当職員等講習会（於：愛媛県、～７日）
	７	令和元年度第２回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於：和泉市）
	14	平安京跡（京都市）関係者説明会（参加者160名）
	15	平安京跡（京都市）現地説明会（参加者290名）、第143回埋蔵文化財セミナー「弥生時代の住宅事情」（於：京都市、参加者126名）
	21	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於：八尾市）
	26	長岡京連絡協議会

編集後記

新しい年を迎え、暖冬ではありますが、まれに厳しい寒さの感じる季節になりました。ここに、『京都府埋蔵文化財情報』第137号が完成しましたので、お届けします。

本号では、投稿原稿のほか、昨年度の共同研究報告１本と、職員の日ごろの研究成果を研究ノートの形で３本の原稿を掲載しました。ご味読いただければ幸いです。

なお、当調査研究センターは、令和２年度で設立40周年を迎えます。記念事業として、展覧会や講演会などを計画していますので、奮ってご参加いただければ幸甚です。

（編集担当　土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第137号

令和２年３月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel　(075)256-0961　Fax　(075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER